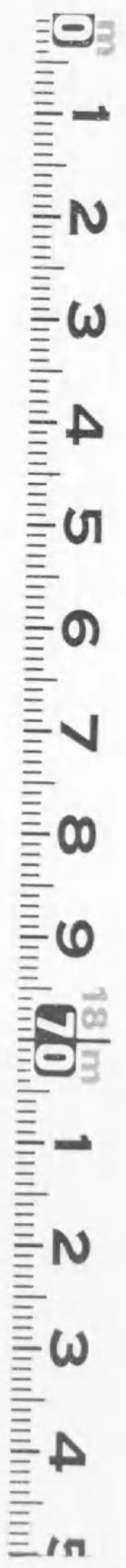
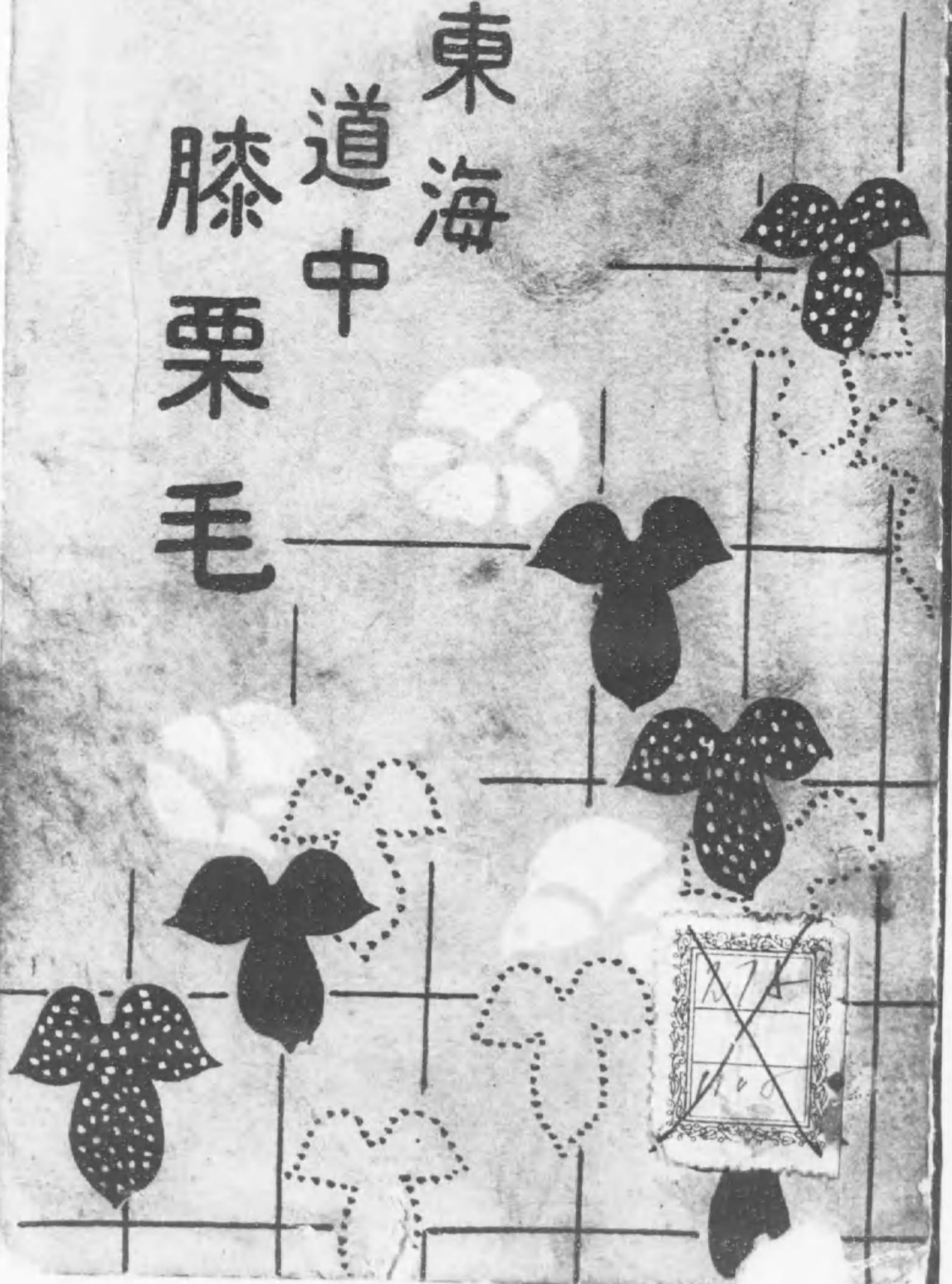


東海
道中
膝栗毛



始



特109
252



東海道
中膝栗毛

十返





序

鬼門 關外 莫道遠 五十三驛是皇州といへる山谷
 が詩に據りて東海道を五十三次と定めらるよしを聞け
 り、予此の街道に毫をはせて膝栗毛の書を著はす。
 元來野飼の邪々馬といへども人喰ひ馬にも相口の版
 元、太鼓をうつて賣弘めたる故、祥に乘人ありて編數
 を累ね通し馬となり、京大坂および、藝州宮島までの
 長丁場を歴て歸りかけの駄賃に今年續五編、岐蘇路に



五十三次之内
 原
 松平画(松平)

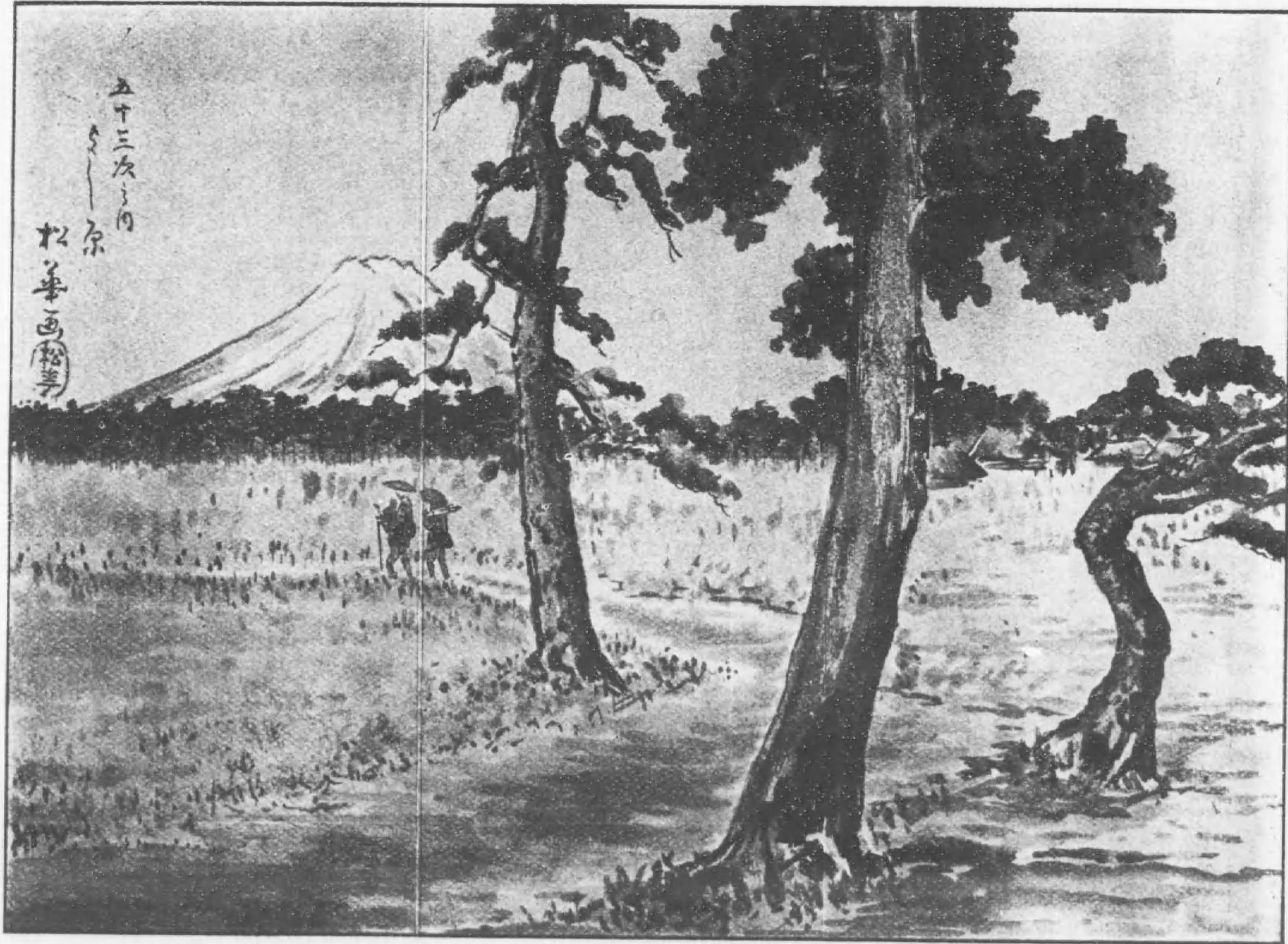
いたる。

彌次郎兵衛、喜多入の稱、異國の龍馬にひとしく、千里の外に轟きたれば渠等が出所を問ふ人有り、依て今その起る所を著し、東都を鹿島立の前冊とし、おくれ走に曳出したる馬の耳に風もひかる趣向のどつて置を棚からおろして如斯。

甲戌初春

十返舎一九

しるす



五十三次之内
原
松華画松美

士 富 里 左 道 海 東

島^し 藤^ふ 岡^{おか} 鞠^{まり} 府^ふ 江^え 興^き 由^ゆ 浦^{うら}

田^た 枝^{えだ} 部^べ 子^こ 中^{ちゆう} 尻^{しり} 津^つ 井^い 原^{はら}

.....
一五	一四三	一四二	一三八	一三四	一三〇	一二八	一二七	一〇五

吉^{きち} 原^{はら} 沼^{ぬま} 三^み 箱^{はこ} 小^こ 大^{だい} 平^{ひら} 藤^ふ

田^た

原^{はら} 津^つ 島^{しま} 根^ね 原^{はら} 磯^{いそ} 塚^{つか} 澤^{さわ}

.....
一〇三	九九	九一	六九	六一	四一	三六	三二

桑名	二五五
四日市	二六六
伊勢参宮	二七〇
津	二七六
松坂	二九〇
山田	二九五
妙見	三〇六
古市	三〇六
内宮参拜	三六一

淀川の夜船	三六六
伏見	三八〇
墨染	三九〇
京都	三九七
京の五條	四一〇
京見物	四一八
京の三條で梯子の珍談	四四二
頼んだ芝居	四五五
北野の天満宮	四八八

大 阪 四九

高 津 の 宮 五二

大 阪 見 物 五〇

道 頓 堀 五九

百 兩 の 當 は づ れ 五〇

生 玉 、 四 天 王 寺 五八

大 團 結 六〇

目 次 終

新 譯 縮 刷 東 海 道 中 膝 栗 毛

十 返 舍 一 九 原 著
仙 洞 隱 士 新 譯

發 端

武藏野の尾花が未すなに懸かる白雲しろくもと詠よみしは昔むかし昔むかし、浦うらの苦屋くるや、鳴立なりたつ澤さわの夕暮ゆふぐれに愛めでて、仲なかの町ちやうの夕景ゆふげ色しきを知らしざる時ときの事ことなりし、今いまは井いの内うちに鮎あゆを汲くむ水道すいどうの水長みづながへにして土藏どざう造つくりの白壁しろかべ建たて續つき香かの物もの桶け、明俵あきだはら、破やぶれ傘がさの置かき所ところまで、地主ぢぬした唯ただは通とほさぬ大江戸おほえどの繁はん

昌他國の目よりは大道に金銀も蒔き散らしある様に思はれ何でも一稼ぎと志して出かけ来る者幾千萬の數限りもなき其中に生國は、駿州府中(今の静岡市のこと)朽面屋彌次郎兵衛といふもの親の代より相應の商人にして、百、二百の小判には何時でも困らぬ程の身代なりしが、安部川町の色酒にはまり其上旅役者鼻水多羅四郎が抱への鼻之助と云いるに打込み、斯道に孝行者とて黄金の釜を堀り出せし心地して悦び戯氣の有文を盡し果は身代にまで途方もなき穴を堀り明けて留度なく尻の仕舞は若衆と二人尻に帆掛けて府中の町を、欠け落すとて

借金富士の山ほどあるゆへにそこで夜逃げを駿河ものかな

新く足久保の茶なる事を吐き散らし頓て江戸に來り神田八丁堀に新道の小借家住居して少しの貯へあるに任せ江戸前の魚の甘美に豊島屋の劍菱、明梅は幾個となく長家の手水桶に配り終りに有金を香なくし是は濟ぬと鼻之助に元服させて、喜多八と名乗らせ相應の商人方へ奉公に遣りしが才智者にて主人の氣に入り忽ち小錢の立ち廻る身分となり、彌次郎は又、國元にて習ひ覺えたりし油繪等を書いて其日暮に、春米の當座買ひ打き納豆、蛤利の刺身、居ながら呼び込んで喰つて仕舞は鏝錢一文も残らぬ身代、さまざま

な苦勞に飽き果て、一層の事の縁喜直しに二人連れで出掛けまいかとの相談を爲し友達に頼みて金子を借

り受け先づ其年は目出度く年を迎へて、きさらぎの中旬より伊勢の参宮と思ひ立ち、東海道へと出かけける。
かしま立ちの狂歌に

難波江のよしあししとも旅なればおもひたつ日を吉日とせん

日本橋 (品川へ二里)

富貴自在冥加あれとや營みたてし門の松風こゝに通ふ春の日の麗かさ、げにや大道は髪かみの如しと、毛筋けすぢはども動かぬ御代みよのためしに
は、鳥とりが鳴く吾妻錦繪あづまにしきゑに鎧武者よろひむしやの美名びなを殘し、弓ゆみも木太刀きたちも頼たのにし
て、千早ちはや振る神かみの廣前ひろまへにおさまれる豊津國とよつくにの勳いさをしは、堯舜げうしゆんの古いにしへ延えん

喜きのむかしも目前まへ見る心地こころとなん。
いざや此時このとき國々くにの名山勝地めいざんしょうちをも巡見めぐみして、月代つきしろにぬる聖代せいだいの御館ごてん
を藥罐頭やくくわんあたまの茶呑話ちやのみはなしに貯たくはへんものと、玉たまくしげ二人ふたりの友ともどち誘さそひつ
れて、山鳥やまどりの尾おの長旅ながたびなれば臍へそのあたりあたりに打換うちかへの金かねをあたゝめ、
かの朽面屋くめんや彌次郎兵衛やじらべゑといふのらくら者もの、食客むさふかの北八きたはち諸共もろとも、草鞋わらぢの
足許あしもと軽く對つひの浴衣ゆかたを吹き送おく神風かみかぜや、伊勢参宮いせさんぐうから花はなの京都みやこに梅うめの
浪花なみはなを志こころし、神田八丁堀かんだちやうぼりの宅たくを出立しゅつたつして、早はやくも高輪たかなわの町まちへ差さし
かゝる、川柳點せんりうてんの前句ぜんくに

高輪へ來て忘れたる事ばかり

とあるけれども、二人の者は何一つ心残りの事もなく、獨身の氣遣

じに鼠の店貸出すのも無駄だと、旦那寺へは佛餉袋を和らかに詰めたれば、外に百銅ばかり地腹を切つて往來の切手を貰ひ受け、大屋へ古借金を済ましたかほりに御關所の手形を受取り、價のあるものは見倒しやへ賣つて金に換へ、我樂俱多物は店請人に贈つて禮を受け、漬菜の重石と錆庖丁は隣家へ残し、千切れた繩腰簾と油壺は向家へ譲つて何一つ取残した物も無く、たゞすこしの心懸りといふは酒屋と米屋の拂ひをせずその儘に捨て置いたのである中へ、跡で恨んで居るだらう、氣の毒だがこれも古歌に
さきの世に借りたを済すか今貸すか
いづれ報ひのありとおもへば

笑ひながらに彌次郎兵衛は狂詩を口吟む。
雖非亡命可奈何
夫居本貫掛乞衆
と打ち興じつ、品川へ着ぬにけり。
借金不報棒尻過
將是川向成干戈

品川 (川崎へ二里半) (神奈川縣武藏國)

こゝは東海道の振り出しである、彌次郎兵衛海邊をばなご品川といふやらんと難じた、北八取敢へす
さればさみづのあるにまかせ

二人とも面白く歩行くともなしに早や鈴ヶ森へ来る、彌次郎兵衛

恐ろしや罪ある人の頸玉につけたる名なれ鈴ヶ森とは

鈴ヶ森を過ぎて次の驛が大森、此處は麥葉細工が名物であるから、家並にこれを買つてあるので、彌次郎又た一首を詠む

飯に焚く麥葉細工買ひたまへこれは子供をすかし屁のため

間もなく六郷川の渡場を越へ、萬年屋といふ宅で晝飯を仕様と、店先さへ腰をおろして一休み。

川

崎

(神奈川へ二里半)

(神奈川縣 武藏國)

萬年屋と云ふに腰を掛る 女「お早うございます」彌「姐さん二膳願

みます」北「コウ彌次さん見なせエ、今の女の尻は去年まで柳で居たつけが、モウ白になつたなア、何うでも杵にてつかれると見へる、そして可訝しい、道中の茶店では何處でも床の間に乾干びた花を掛けて置くナ、アノ掛物を見ねエ、何んだ」彌「那りア鯉の瀧登りよ」

北「俺りア又鮎が素麵を食つてるのかと思つた」

彌「コウ無駄口を叩かねエで早く喰ひねエ、汁がさめらア」

北「オヤ何時の間に持つて来た」と早くも残らず喰ひ終り 彌「おヤ

う」それから二人は勘定を済ませ此處を立つて出て行く向ふから、お大名の行列と見へて先拂ひ、一人は六十位ゐの老爺、今一人は十

四五の奴で、何れも驛人足だ。先「下アに〜、冠り物は取りませうぞ」北「亡命者は下座をしねエでも宜いと見へる」北「何故……」北「ハテ、かぶりものは通りませうぞと言つてる」先「馬士、馬の口を取りませうぞ」北「馬の口も取り脱しが出来るのか、ハ、ハ、ハ、ハ、」先「後の人背が高いぞ」北「俺らの事か、高い筈だ愛宕の坂で九紋龍と肩を並べた男だ」北「洒落なさんナ、飛んだ目に遣ふせ」

北「マア見ねエ霞町新道の土用干しと言ふもんだオヤ〜」北「弓を擔いで居る人の笠を見ねエ、頭と大分延引してゐらア」北「そしてあの羽織の長さは、暖簾から翠玉が覗いてゐる様だ」北「殿様は好い男だナ、囃女中衆がこすり付けるだらう」北「籠棒奴、いろ〜な事に

世話を焼いてやがる、アノ人達らだつて無暗にそんな事をして詰るものか」北「何故……」サア駕籠がおりたから行かう」と云つて此處を歩き過ぎる、驛はづれ迄来ると馬「親方、歸り馬だ乗つてお呉んなさい」北「サア安くは乗つても宜いが……」馬「酒代で行かうツバ（二百文）で乗つてお呉んなせエ」北「宜からう」馬の賃銀の相談も出来たから、彌次郎兵衛も北八も馬に乗ると、曳き出す鈴の音シヤンシヤン〜

すると又先方から来る馬士互ひに顔を見合して
用「エ、畜生奴、早いナ」
乙「糞を喰へ」

甲「ウヌ腎でも甜れッ」

これが此の連中行き違ひの挨拶で、馬方船頭、お乳の人、口の悪い三副對、互ひに悪口を言つて別れる、スルと彌次郎兵衛を乗せた馬士 甲「コレ伊賀よ、昨日手前エと飲んで居た野郎は、那リア上の驛の房州だナ」此の連中は常に名前を呼ばないでみな生國の名を通名にしてゐる。

乙「然うよ、先達ての晩にナ、アノ房州奴の嬖アが俺らの親方の裏口へ小便したと思ひねエ、ナニがシヤ／＼といふ音を聞くと俺れも氣が悪くなつたから、此奴ツア介意ふ事アねエ打つめて遣らうと思つて、

酔つた元氣で突然腕を捻ちあげてそこへ打つ倒したと思へ、然うすると嬖アめ臍を潰しアがつて、こりア何をするかと吐しアがつたからエツ何をするも犬の糞もあるもんかい、打つめめるのだ黙つて居やアがれといふと、何しろアの體格だから甚い力のある女だ、この野郎見やアがれツと俺れを突き倒しがアつたんだ、エ、何うしアがると俺らア一つ打ん擲つて厩の壁へ押し倒して遣つた、ところがまだ愚圖／＼吐しアがつたから、親方の子に遣らうと思つて餅を買つて持つて居たのを、二つ三つ嬖アの口へ捻ち込んだら無茶／＼と喰ひアがつて、モツと呉れろと言やアがつたので、

俺も其處いら探りまわして馬の糞があつたのを、それたア知らねエ

で那奴ツの口へ押し込んだら、胸を悪るがって腹を立てたの立てねエのつて、俺れも餘まり可憐そうに成つたから、到頭焼杉の下駄を一足買つて遣つたなア忍々しい」此の話しに二人も大いに興を催はし、笑ひながら行くうち早や神奈川の棒鼻へついた、此處で二人は馬を下り、神奈川の臺に来る。

神奈川

(程ヶ谷へ一里九丁) (神奈川縣武藏國)

此處は海岸なれば片側に茶店軒を並へ、いづれも二階造り、欄干付きの廊下棧橋などを拵らへて、波打際の景色は又一しほの眺めた茶店の女は各々その門口に立つて、女お休みなさいまし、温たかな

冷飯もございます煮立ての肴のさめたのもございます、蕎麥の太いのをお食りなさいまし、餛飩の大きなのもございます、お休みなさいまし」とやかましく呼び立てる、二人はこゝで一杯飲まふと一軒の茶店へ這入つて来た。

男「北八見ねエ、美くしい太エもんだ」

北「ハ、アウム好い娘だ、時に何がある」北八は其處らを見廻して肴を眺らへ酒を注文する娘は前垂で手を拭きながら、釜の焼いたのを温めて徳利に、盃も添へて持つて来た。

女「これはお待違様でございました」男「姐さん、お前エの焼いた釜なら美味からう」娘はフ、ンと笑つて對手にもせず、戸外の方を向

いて客を呼びながら向ふへ行く。『お休みなさいまし、奥が廣ふございます』北「奥が廣い筈だ、安房、上總まで續いてゐる」『コウ北八見ねエ、この肴はチトござつた目許だ』と打ち返しながら見て彌次郎兵衛

ござつたと見ゆる目許のお肴はさては娘が焼きくさつたか
北八もこれを聞いて同じく古事付けた、

美味そうに見ゆる娘に油断すなやつが焼きたる味の悪さに
斯く打ち興じて此處を立出で、旅路の氣安さに高聲に話しながら行くど、此の宿のはづれから十二三才の伊勢参りの小僧、後になり先になりしながら、『旦那様、一文おくんない』『オ、遣らう、し

かし手前エは何處だ』小「私らア奥州……」北「奥州の何處だ』小「笠にかいてありやす』『ホ、ウ奥州信夫郡幡山村長松……ウム幡山か、俺らも手前エ達の方に居た事がある、幡山の與次郎兵衛どのはまだ達者であるか』

小「與次郎兵衛と言ふ人は知りません、與太郎ごんなら私の隣りにあります』『オ、その與太郎よ、その又宅に吞太郎といふ老爺さんがある筈だ』小「老爺はあります』『そして與太郎ごんの内儀さんは確か女だつたつけ』小「阿母ア様は女でございます、能く知つて居な

る』
『今ぢや何んと言ふか知らねエが、俺が居た時分の名主ごのは熊

野傳三郎と言つてナ、その内儀さんが宅に飼つて置いた馬と情事を
して逃げた事があるが、那りア何うしたか知ら……」小「そりア能く
知つてゐなさる、庄屋さんの阿母アさんは、宅の馬右衛門といふ男
と「命りました」阿「イヤこれは妙々」阿「コレ小僧、なせ愚闍くす
る疲勞れたか」

小「私は空腹くて堪りません」

阿「然うか、ちあ餅でも買つて遣らう来い」五文の餅を五ツ六
ツ買つて遣りながら、いよ／＼調子に乗つて

阿「なんと小僧能く知つてゐるだらう」小「アイ／＼」頻りに餅を食
つてゐる、處が此道連れの伊勢参り十四五歳の前髪が後から呼びか

ける 前「オーイ／＼長松／＼」小「早く来い／＼」前「お前は美味そう
に餅を食つてゐるナ、俺れにも一つ呉れ」小「向ふへ行く人に買つて
貰へ、何んでも那の人が國許の話しをするのを、ハイ／＼言つて聞
いてゐると直きに買つて呉れる」前「然うか、俺れにも一つ買つて貰は
う」と驅付けて来た。

前「叔父さん、私にも餅を買つてお呉れ」阿「ウム、シテ手前エは何
處だ……ハ、アこれも奥州下坂中村か……コレ手前エの村に與茂作
といふ老爺があるだらう」前「先に餅を買つてお呉れ、然うしなけ
りア貴郎の言ふ事は當らないよ」阿「廢しアがれアハ、ハ、ハ、」北「こ
いつは擔がれたハ、ハ、ハ、」笑ひながら行くほど、間もなく程ケ

谷の宿に着きにける。

程 ケ 谷 (戸塚へ二里十九丁) (神奈川県 武蔵國)

驛に入ると兩側の茶店から旅人の餌鳥に出して置く留女の顔は、宛然假面を冠つた様に眞白に塗立て、何れも井の字緋の紺前垂を緋めてゐる、これぞ古へ此處を帷子の宿と言ふた處だ、兩人の前をブラク行くのは、田舎者五六人。

女「お泊り成さいまし」田「旅籠賃さへ安くば泊るべエ」女「お旅籠賃は二百づつでございます」田「イヤ然うは出せぬエ、その代り湯は微温くても宜い、菜は今迄換へた事はねエが、飯と汁はたつた五六杯

も食へばそれで宜い、そのうへ明日の晝飯に此柳行李に一杯詰めて貰ふ外、何んにも要らない、旅籠賃は百六十文づつ出そう」女「そんなら他へお泊りなさいまし」田「ハ、ア泊めざア行きますべエ」と行つて仕舞ふ、彌次郎兵衛これを聞いて興に入り、一首をよむ

お泊りはよい程ヶ谷と留め女戸塚前では放さうりけり

笑ひながら行く内に品野坂といふ處へ來た、此處ぞ武蔵相摸の國境と聞いて北八

玉くしげ二つに別る國境とこゝ變れば品野坂なり

既に日も西山に傾き晚鴉時を急ぐ頃となつたから、今夜は戸塚の宿に泊らうと、急ぎ行く其途中、彌「コレ北八待ちねエ話がある、何

んでも道中は飯盛女を勤めて五月蠅エから。此處に一つ計略がある
俺れは老爺なり又お前エは二十歳代と言ふのだから、親子と言つて
も宜い位ゐだに依つて、これから泊りくでは何んと親子と言はう
ぢやねエか」北「オ、これは妙だ、なるほど其れぢやア勤めねエで宜
い、そんならお親父さんと言ふのか」彌「然うさ、貴様は萬事息子氣
取りだが承知之助か」北「宜しく」然う言つて又宜い女でもあつたら
此の息子を出し抜くめエせ」彌「馬鹿ア言ふな、おやもう戸塚だ。

戸

塚

(藤澤へ二里)

(神奈川縣相模國)

二人は顔見合せて 彌「宿は笹屋に仕様か」北「親父さん、彌「何だ」

北「此處ぢア根つからお泊り成せエと言つて引張らねエナ」彌「ホン
に其の筈だ、此處は何領主かお泊りと見へて、皆んな宿屋に札が貼
つてある」

北「コウ向ふの宅が意氣だせ」

彌「コレ姐さん、泊めて呉れる氣はねエのか」女「イエ今晚はお泊り
で合宿はなりませぬ」彌「南無三、然うだらう」と、段々宿を捜して
見たが悉く塞がつて泊めないから大きに間違付いて、彌次郎兵衛

泊めざるは宿を疝氣ど知られたり大罫丸の名ある戸塚に
かく詠みて宿外れで漸やく宿屋の明いてゐるのを見付けたから此家

へ這入つて 彌「今夜二人を泊めて呉んねエ」亭「お二人でございますか、何うぞお泊りなさいまし、當宿、宿は皆なふさがりでしたが、私しの方ばかり宿に當りませぬ」

彌「しかし斯んな綺麗な宅がなせ當らねエ」

亭「へい私し方は新宅でございますから……ソレお鍋、お湯は何うだ」

其内盥に湯を汲んで来た後、又柳行李や風呂敷包を奥へ運んで行く 北「コウ彌次さん……ちアねエ親父さん、お前エの草鞋も一緒にして置くよ」彌「オ、然うして俺れの脚絆もザツと濯いで置け」北「ナニ脚絆も濯げ……」顔を見ると彌次郎兵衛が頻りに目付きで知らせ

てゐるから、ブツ／＼言ひながら北八漸やく草鞋も揃へ脚絆も洗つて仕舞つた 女「姐さん茶を一つ宛呉んな」言ひ捨て、座敷へ通る、間もなく女中は盆に茶を二つ載せて持つて来た 女「直ぐにお湯をお召しなさいまし」と茶を其處へ置いて立つて行く。

彌「コウ北八、お前エ那の女の面ア見たか、真中が凹んで何んの事アねエ、踏み返し馬蹄石といふものだ」

北「然りア彌次さん」
女「ソレ女が来たッ」

北「オツと親父さん湯へ這入らねエか」このうち女中に酒肴を持つ

て来る。

彌「オヤ酒か、江戸の者と見ると何處でも斯されるにア閉口だ」

北「何故、酒を出しア別に錢を取るのか」彌「知れた事よ」と言ひながら手拭を取つて湯殿へ行く。

女「サア一つ召飲りませ」北「これは御馳走だ、コウ女中、俺の親父に早く上れと言つて呉んナ」女「ハイ然う申しませう」立つて行く、そのうち彌次郎兵衛湯から上つて来た 彌「ハ、ア何んだ、こりア肴が宜いから飲めるぞ、コレ北八、手前エは早く湯に入つて来い」
北「イヤ一杯飲んでから這入らう」

彌「エ、手前エも意地の穢ねエ奴ツだ、這入つて来ねエナ」北「ちあ

ホツ／＼飲つて居て呉んナ」

北八も湯に這入る、處へ出て来たのは此宅の亭主 亭「これはお客様様、何んにもございませんが、一つ召飲つて下さいまし」彌「イヤ御

亭主さん、斯うされちあ迷惑だ」亭「イエこれは斯様でございます、

私共は今迄他の商賣をいたして居りましたが、今度此宿屋をいたしまし

まして即ち今日が店開きでございます、貴郎方は始めてのお客様故

それでお祝ひに一つ差しあげるのでございますから、別に御酒代を頂くのではありませんから、お心置なく召飲つて下さいまし」
彌「然うか、イヤ其れは先づお芽出度い、しかし御馳走になつては近頃お氣の毒だ」

亭「ナニ決して御遠慮なく、今に又詰らぬ物でも出来ませう」
モウ介意つて呉れては困る」亭「何うぞ御悠りと……」

言ひ捨て、立つて行く、北八は此時風呂から出て来て、北「様子は残らずあれにて聞いた、親方無價とは有難エ」

「コレ洒落すとモウ一遍湯に這入つて來ナ、其の内に皆んな俺れが飲んで仕舞はう」北「然うだらうと思つて湯へ這入つても洗ふ氣なア成らねエ、イヤ足はまだ泥だらけだ、まゝよサア始めねエ」
「モウ疾くに始めてゐらア、ドレモウ一つ始め直してから献そう」

北「イヤ俺れはこれだ」
と茶碗に酒を酌いで突然りグイ〜と飲み出した。

北「ア、好い酒だ、時に肴は……ハ、ア蒲鉾も四板だ、鮫ぢアあるめエ、漬生姜に車蝦、野暮ぢアねエナ、コウ親父さん、此の紫蘇の實が美味エ、こればつかし食ひなせエ」
「馬鹿ア言へ、そりあ跡へ残るに定つたものだ、時にモウ吸物が出そうなもんだ、イヤ待ちなよ」

と襖の間から勝手の方を覗き

「出る〜、今盛つてらア、オヤ南無三神様へあげたのだ……イヤア來るぞ〜」

と膝を直してゐる處へ女中が吸物を持って來た、女「アノお銚子を換へませう」と空徳利を持つて行く、跡で二人ながら直ぐに吸物椀の

蓋を取つて、北「イヤ赤味噌とア洒落てるワ、よもや種味噌ぢアあるめエ、時に銚子は何うだ」彌「忙しねエ、たつた今持つて行つた處だ」

言つてゐる内に女中は銚子を持つて來ると、二人ながら飲める口だから差しつ押へつ、次第に酒が廻はつて親子の挨拶も無茶苦茶となつて來た。

彌「コウ姐さん、些と合をして呉んナ」

女「妾しは一向不調法で」

北「コレサ然う言はないで……そして今夜お前エと些とナ、これが固めの盃だ、ソラ親父さん」彌「伴奴はモウ大分酔つて來たナ」

北「ナニ酔つちア居ねエぞ、アノ親父の難かしい面は、アハハハ、ハ、」

と卷舌で洒落始めた、女中は驚いて膽を潰しながら、受けた盃を飲みほして彌次郎兵衛の方へ差す。

北「エツ親父の畜生奴、思ひざしに預かつたナ、コウ女中、後に願みます」としなだれ掛るから女は呆れ返り、早々逃げ出して仕舞つた。

彌「コウ北八、貴様女の前でそんな事を言ふナ」北「何故言つて悪くは言ふめエ、アの女奴が可訝な目付をするので、モウ親子の縁が切り度くなつた」其内膳も出て食事も終り、遂に寢床に這入つたが、

女中の方では本當の親子と思つてゐるので、何を言つても對手にならぬ、今更ら獨り寝の枕寂しく、隙洩る風の音さへ寒く聞へたから二人とも可笑しくなつて北八

一筋に親子と思ふ女よりたゞ二筋の錢儲けり

旅路の疲れに酒の酔グツスリ寝入ると早や曉の鐘、戸外には馬の嘶く聲鐸の音、兩人共起き上つて洗顔も済ませ朝飯も食つて此處を出立し、間も無く藤澤の宿に着いた。

藤

澤

(平塚へ三里半)

(神奈川県相模國)

ア、勞れた〜……そして腹が北山になつた」
「マア休むで往か

ふよご、やがて二人は棒鼻の小さな茶屋に腰をおろし、見ると團子の焼いたのが並べてある。

「北婆さん、その團子は冷めてエが、チト暖めて呉んナ」

「ハイ〜ドレ焼直してあげませう」
婆アは消炭の火を煽いで團子を暖めてゐる處へ、六十位ゐの合羽を着た一人の田舎老爺、この店先さへ立ち止つて

老「モシ一寸物をお尋ね申しますが、江の島へは何う行きます」

「お前エ江の島へ行きなされるか、そんなら此處を真直ぐに行つて遊行様のお寺の前に橋があるから……」

北「ホンに橋と言へア儘か其橋の向いだつて、意氣な娯アのある茶

屋があつた」**男**「然う〜去年俺れが山へ行つた時泊つた宅だ、アノ
嬢アは江戸の者よ」**北**「道理で氣が利いてらア」

老「モシ〜其の橋から何う行きます」**男**「オツと其橋の向ふに鳥居
があるから、其處を真直ぐに……」**北**「曲ると田浦へ落ちますよ」

男「エ、手前エ駄止つてろい、其の道をズツと行くと村外れに茶屋
が二軒ある處がある」

北「ホんにそれよ、能く腐つた物を喰はせる茶屋だ」**北**「其りア手前
エの言ふのは右側だらう、左側の宅は宜いはず、去年俺が行つた方
はな、ピチ〜する鯛の焼物、それに大平が海老のはね出るやつに
玉子と姑蘇と大椎茸にぞして……」

老「モシ〜私は其んな物は食はないでも宜いので、そこから又
う行きます」

男「其處をズツと突き當ると石の地蔵様があります」

北「アノ地蔵様は瘡の腫が効くそうだ、俺が方の瘡があれで癒つ
た」**男**「ホんに瘡と言へア新道の金箔屋の種吉奴は草津へ行つたが何
うしたか知ら」**北**「あれは大福町に今世帯を持つてらア」**男**「大福町と
云ふのは何處だ」**北**「大福町は俺の通りを真直ぐに當座町へ出て、判
取町から店賃町を通つて地代屋敷の算盤橋を渡ると其處が大福町
だ」

老「其んな事よりか江の島へ行く道を教へて下さらいまし」**男**「ホんに

然うだつて、其地蕪様から大福町を真直ぐに行くとの……」老江の島へ行くにも其んな町がございますか」

彌「イヤこりア江戸の町だつた」老「エ、此の人は江戸の町は聞いては居ません、途方も無い人だ、ドレ先きへ行つて聞きます」

プツ／＼叱言を云ひながら行き過ぎる。其内團子も喰つて此處を立出で藤澤の宿へ這入つて來ると、例の通り兩側の茶店から呼び込む聲喧ましく足早やに此處を通り過ぎて早くも馬入川の渡しに着いた。

北八此處は何んど云ふ川だと聞くと、たゞ渡しと云つたばかりで薩張り判らない、此の時彌次郎兵衛これを聞いて笑ひながら

平塚 (大磯へ二十七町) (神奈川縣相模國)

川の名を問へば渡しとばかりにて入が馬入の人のあいさつ

見渡せば馬入の流れは帯のやうになつて居る、そも此馬入川は遠く甲斐の猿橋から流れ落ちるのだと云ふ。

聽て兩人は此渡しを渡つて辿り行く内、其途中の白旗村と云ふのは往昔源義經の首が此處へ飛び來つたのを祀り込めて、白旗の宮と云ふのがまだ残つてあるといふのを聞いて彌次郎兵衛

首ばかり飛んだ話しの残りけりほんの事は白旗のみやそれより大磯へ來て北八虎が石を見て

此里の虎は簀にも剛のものおもしろし石となりし貞節
續いて彌次郎兵衛

さり乍ら石になるとは無分別一つ蓮の上にあや乗られぬ
かく打興しながら何時しか大磯の宿も過ぎてける。

大

磯

(小田原へ四里八丁) (神奈川縣相模國)

名高き鳴立つ澤の古跡を探り、文覺上人が手づからの刀作りなり
と傳へられし西行の像を拜みて

吾々も頭をわりて歌詠まん刀作りなる御影おがみて
アラ〜歩行いてゐる内、早や曾我の中村に入幡、八幡の宮も通り

過ぎ、酒匂の川に差掛つた

吾々はふたり川越ふたりにて酒匂の川にめぐりてよつたり

この川を越して行くと小田原の宿引が早くも道に待ち受けて

引「貴郎方はお泊りでございますか」彌「お前エ小田原か、俺等ア小

清水か白子屋に泊る心算だ」引「今晚は兩家共お泊りがございませうか

ら何うぞ私しの方へお泊り下さいまし」彌「しかしお前エの處は綺麗

か」引「左様でございます、先日建て直しました新宅でございます。

座敷は幾間ある」引「ハイ十畳と八畳と店が六畳でございます」

彌「据風呂は幾個ある……」

引「上と下と二ツづつ四ツでございます」

彌「女中は何人だ……」

引「三人でございます……」

彌「綴標は……」引「随分美しうございませう」彌「お前エは亭主か」

引「左様で」彌「内儀さんはありますか」引「ございませう」彌「宗旨は」

引「浄土宗」彌「寺は近處か」引「不エ遠方でございませう」彌「ぢア葬禮は何時だ」

北「コウ〜彌次さん、お前エも飛んだ事を云ふものだ」彌「ハ、ハ、ハ、ツイ口が逆つた、ハ、ハ、ハ、」

笑ひながら打連れ立つて來ると、程なく小田原の驛へ至る。

小田原

(箱根へ四里八町)

(神奈川縣相模國)

城下のこととして人馬の往來なかく賑かである、旅人を引く兩側の留め女「女」お泊りなさいませう〜」呼び立つる聲轟ましく、彌次郎兵衛

梅濱の名物とてや留め女口をすくして旅人を呼ぶ

この宿の名物たる賣薬いろいろ店の前に來て 北「オヤ此の宅は屋根に凸凹のある宅だ」彌「これが名物のういろいろだ」

北「一つ買つて見様、しかし甘味エか」彌「甘味エどころか、腮が落ちる位だ」北「オヤ餅かと思つたら薬店だナ」彌「アハ、ハ、ハ、」

一つ故事つけだぞ

ういろろを餅だと巧く欺されてコワ薬ぢやと苦い顔する

やがて二人は宿屋へ着くと宿屋の亭主先きへ驅け出して 亭「入ら

つしやい、サアお泊りだよ、お三、お湯を取つて差しあげろ」

女「お早いお着さでございます」

座敷へ案内して茶を二つ酌んで持つて来る、處へ女中座蒲團を持

つて来る 北「コレ、女中、煙草盆に火を入れて来て呉んな、」

北八、手前エ飛んだ事を云ふもんだ」北「何故」何故つて煙草盆

へ火を入れたら焼けて仕舞はア、煙草盆の中にある火入れの中へ火

を入れて来いと云ふものだ」

北「エ、お前エも言葉咎めをする男だ、そんな事を云つてちア日の

短かい時にア煙草も喫まずに居にやならねエ」時「時に腹が北山だが

今飯を焚く様だ、本當に埒の明かねエ」

北「コレ彌次さん、俺よりお前エの方が文盲なものだ」

時「何故……」

北「飯を焚いたら粥になつて仕舞ふわナ米を焚くと云へば宜い」

時「馬鹿ア吐せ、アハ、ハ、ハ、」

云つてゐる内に女中煙草盆を持つて来た 北「モシ姐さん湯が沸い

たら這入りやせう」時「其リア人の事を云ふ汝が何んとも知らねエナ

湯が沸いたら熱くて這入れるものか、それも云ふなら水が湯に沸い

たら這入りやせうと吐せ』

女「アノモシ、お湯が沸きました、お召しなさいまし」彌「ホイ水が沸いたか、ドレ這入りやせう』

と直ぐに手拭を提げて風呂場へ行つて見ると、此の宿屋の亭主は上方者と見へて、据風呂桶は上方に流行る五右衛門風呂だ、彌次郎兵衛は此の風呂の勝手を知らないから、上に浮き上つている板を蓋と思ひ、何心なく其れを取つて除け、スツと片足中へ踏みこんだ、處が釜が直接であつたから足に火傷をして膽を潰し

彌「アツ、、、、、熱ツ、こりや飛んでもねエ据風呂だ』
といろく考へたが、何しる風呂の事であるから、何うして這入る

のだと云つて聞くのも馬鹿々々しい、そこで風呂の外で身體を洗ひながら四邊を見ると、雪隠の傍に下駄が一足並べてあるから、此奴ツ面黒いとその下駄を穿いて中へ這入り、洗つていると北八は待ち兼ねて湯殿を覗いて見ると、悠々と淨瑠璃の聲。

彌「お半涙の露塵ほごも……」

北「エ、呆れつちまふ、道理で永湯だと思つた、宜い加減に上らねえか』

彌「コレ一寸と俺の手を觸つて見て呉れ』

北「何故』

彌「モウ茹つたか知らん』

北「宜い氣なものだ」

と云ひながら又座敷へ戻つて来る、彌次郎兵衛は湯か下駄を蔭へ隠して素知らぬ顔。

彌「サア這入らねえか」北「オツと来た」

と早々裸體になつて急ぎ湯殿に行き、片足グツと突込んで又火傷をした。

北「アツ、も、熱ツ、彌次さんく、大變だ、一寸来て呉んな」

彌「騒々敷い何だ」北「コレお前エ、此の風呂へ何うして這入つた」

彌「馬鹿奴、据風呂へ這入るのに別に這入り様があるものか、先づ外で翠玉をよく洗つて、そして足から先きへドツブリコ、スツコツ

コ」北「エ、洒落なさんな、釜が直にあつてこれが這入られるものか」彌「這入られりヤこそ手前エが見た通り、今迄俺が這入つて居た」北「お前エ何うして這入つた」彌「ハテ執念い男だ、据風呂へ這入るのに何うして這入つたとは何んの事だ」

北「ハテ面妖な……」

彌「何も六ヶ敷い事アねエ、初めのうち些と熱いのを辛抱して居ると後にア宜くなる」

北「馬鹿ア云へ、辛抱して居る内にア足が足黒に焦げて仕舞ア」

彌「エ、埒の明かねえ男だ」

心の内の可笑しさを堪へて其儘座敷へ歸る、北八はいろくくと考

へながら其處らを見廻し、彌次郎兵衛が隠して置いた下駄を見付けてハ、ア判つたこれだと心に領き、直ちに其の下駄を穿いて風呂の中へ這入つた。

北「彌次さんく」彌「何んだ又呼ぶのか」北「成る程お前えの云ふ通り慣れて来ると別に熱くはねえ、ア、宜い心持ちだ……憐れなるかな石童丸はツンレンく」

彌次郎兵衛は四邊を見ると、自分が先刻隠して置いた下駄がないから、扱ては此奴ツ見付たナニ可笑く思つて居るうち、北八は餘り永く風呂の中に座つて居たから尻が熱くなつたので、立つたり座つたりいろくして、餘り下駄でグワタくと踏みちらし、釜の底を踏

み抜いたと見へて、湯は火の中へ流れ込んでシユラくく。

北「ヤアイツ助け船くツ」彌「何うしたく、ハ、ハ、ハ、」

宿屋の亭主は此の物音に驚いて、裏口から湯殿の方に飛んで来て膽を潰した。

亭「オヤツ、何うなさいました」

北「イヤモウ命に別條は無えが、釜の底が脱けてア痛ツく……」

亭「コリヤマア何うして底が脱けましたか……」

北「此の下駄でグワタくやつたからさ……」

云ふから亭主は不思議そうに北八の足を見ると、雪隠の下駄を穿いているから、亭「イヤアお前さん、又途方もねえお人だ、据風呂へ

這入るのに下駄を穿いて這入るといふ事がありますか、途方もない事だ』北「イヤ私ちも初めは跣足で這入つて見たが、餘まり底が熱いからさ』亭「イヤはや飛んだ事をするものだ』

と大きに立腹する、北八も餘りの氣の毒さにソコソコに身體を拭いて云譯をする、彌次郎兵衛も可笑しく思ひながら中へ這入り、釜の修繕賃として二朱銀を一つ出し、漸やく詫言をして済まして貰つた彌次郎兵衛

据風呂の釜をぬきたる科ゆへに宿屋の亭主尻をよこした

北「忌々しい』

北八は思ひ掛けなく二朱銀を一つ棒にぶつて大いに歸いでいる、

その内に膳が来たから飯もソコソコにして、洒落も無駄口も一向聞かないで、たゞ茫然黙り込んでゐるばかり。

彌「コレ手前え何も辯で事アねえ、大きに得をしてるぞ』

北「何が得したのだ……』

彌釜をぬいて二朱ちや安い、葎町へ行つて見る其んな事ちや済まねえわい……』

北「エ、洒落るなツ、人の心も知らねえで』彌「イヤそれでも手前えが其んなにして居ると、俺ア氣の毒な事がある』北「何が……』彌「先刻の女中が後に忍んで来る筈にして置たから、側で手前えが氣を悪くして尙の事聞ぐだらうと、それが何うも氣の毒だ』北「オヤ本當か

何時の間に約束した」其んな事に如才のあるのデアねえ、先刻手前えが湯へ這入つて居る時、現金で先きへ御祝儀を渡して置いた、何んと早いもんだらう、へ、、、何時でも色男は五月蠅えのハ、、、ドレモウ寝様か」

と便所に立つて行く、其後へ女中が来て床を延る。

北「コレ姐さん、お前え俺の連れの男に何か約束をしたてえデアねえか」

女「イ、エホ、、、」

北「イヤ笑ひ事デヤねえ、是リア秘密の事だが那の男は素的な瘡癩さだから傳染らねえ様にしなせえ、お前えが瘡を受けチャ氣の毒だ

から云つて聞かすが、必らず秘密だよ」

ヒソ／＼もので本當らしく云ふと、女は驚いてゐる様子、北八調子に乗つて

北「そして足は年中雁瘡でなんの事はねえ乞食坊主の菅笠を見る様だ、所々に油紙の蓋がしてある、それに又那の男の脇臭の臭さ、其癖執念い男で嚙りついたら離しアしねえ、そして妙なのはアノ瘡癩さど云ふものは口中の悪臭いもので、俺も竝んで飯を食ふさへ嫌でならねえが仕方がねえ、思ひ出して虫唾が走るベツ／＼」

云つてゐる内に彌次郎兵衛は便所から出て来る様子。
女「モウお寝みなさいまし」

急いで立つて行く、彌次郎兵衛は座敷へ戻つて來ると直ぐに夜着を冠つて

彌「ドレ懐裡を暖めて置いて遣らう」北「忌々しい、今晚の様に詰らねえ、火傷をして二朱銀一つ打奪られる、その上アノ美しい女中を側で抱いて寝られてホンに踏んだり蹴つたりの目に逢ふワ」彌「へ、勘忍しる、今夜ア些と堪らなくからう畜生奴、ハ、、、オヤ北八、モウ手前え寝るかモツと起きて居ねえ」

北八は少しも頓着なく高野でゴ〜〜。

彌「モウ來そうなものだ」

一人床に這入つて待てど暮らせど音もない、寧い先刻錢を遣つて

無駄になつたのかと、氣が氣でなく堪へ兼ねて無暗に手を鳴らすと宿のお内儀が出て來た。

内「アノお呼びなさいましたか」

彌「イヤお前えでは判るめえ、先刻此處の女中に些と頼んで置いた事があるから、何うぞ一寸と寄越して呉んねえ」内「ハイ、しかし貴郎方のお座敷へ出ました女は雇人でございますから、モウ自宅へ歸りました」彌「エツそりア本當か、イヤ其れヂヤ宜し〜」内「ハイお寝みなさいまし」
と立つて行く。

北「アハ、、、」彌「籠棒奴、何が可笑しい」北「イヤこれでお互ひ

だ、モウ安堵して寝様か」

彌「勝手にしやアがれ」

可憐そうに彌次郎兵衛は、北八の姦計とは知らないから二百文の
錢を無駄にして其儘寝轉りしながら遂頭一夜寝入る事もようしない
可笑しく思つた北八

胡麻鹽のそのからき目を見ようとして

おこりにかけし女うらめし

間もなく聞ゆる遠寺の鐘に一睡の夢は破れ、夜も早や明け放れた
から起きてソコソコに仕度をして立出でたが、今日は名にあふ箱根
八里、幽谷關もたゞならぬ小道ソコソコ瓜先き上りに道を辿り行く

内、風まつり近くなつて彌次郎兵衛

人の足に踏めど叩けど箱根山本堅地なる石だかのみち

この湯本の宿と云ふのは兩側の家の造り綺麗で、何處の店でも美
くしい女を二三人づつ店先きに出し、名物の挽物細工を賣つてゐる
北八は一軒々々覗いて見て

北「オヤ、洗粉の看板を見る様に、顔と手の先きばかり白い女が
居らア」彌「時に何か買うか」

女「お土産お買ひなさいまし、お這入りなさいまし」彌「コウ姐さん
其處にある物を見せて呉んねえ」

娘は又他の客に對手になつて商ひをしているから振り向きもしな

い、勝手から飛んで出て来たのは婆アである。

婆「ハイ、是れで御座いますか……」
と婆アでは不承知だといふ顔付きにて

彌「それぢやねえよ、コウ姐さん、其方の方を見せてくんない」
「ハイ、これでございまするか」
彌「エッ其れでもねえ、コウ姐さん、お前えの手に持つてゐるは其りア何んだ」
婆「ハイ、これは煙草入れでございます」
彌「コレ、此の事だ、時にコリヤ幾錢だ」
婆「ハイ、三百でございます」
彌「百ばかりにしなせえ」
婆「貴郎さまも餘りナ、貴郎方のお高庇で斯う商ひをして居りますのに、懸直なぞは決して申しませぬ」

チロリ彌次郎兵衛の顔を見ると、忽ち夢中になつて

彌「そんなら二百よ」
婆「モウ些とお召しなすつて下さいますし、オホ、ハイ、」

面白くもない事に愛嬌笑ひをして又ぞチロリ彌次郎兵衛の顔を横目で見る。

彌「え、そんなら三百」
婆「モウ少しでございます、オホ、ハイ、」
彌「面倒な、四百」
婆「四百文それへ投げ出して煙草入を買ひ取り外へ出て」
彌「北八サア行かう」
婆「有難うございました」
彌「ハイ、ハイ、」
三百の物を四百に買ふとは新らしい
彌「其れでも惜しくはねえ、アノ娘は餘程俺に気があつたと見へる」
婆「置さアがれ、ハイ、」

「其れでも初めから俺の顔ばかり横目で見て居た筈だアノ娘の目を見たか、篋睨みだ、ハハハハ」

行くうち蓼栗頭の小僧五六人ブラトク歩きながら

「権現様へ御代参、一文やつてお呉んなさい」北「ナニ御代参とは何んだ」

「貴郎方の代りにお参りをするので……」

北「ナニ俺等の代りに、いづれを見ても山家育ち、身代りにする間があるものか、碌な首は一つも無い、イヤ時にアノ鉦はなんだ」

「名高い箱根のさいの河原へ来たぞ〜」と云ひながら辻堂にさすがにさいの瓦屋根されども鬼は見への極楽

お茶漬のさいのかわらの辻堂にしめた様ななりの坊さま

それより箱根の關所も無事に打過ぎ

春風の手形をあけて君が代の戸さゝぬ關を越ゆる芽出度さ
悦びながら峠の茶店で悦びの酒を酌みかはしける。

箱

根

(三島へ三里廿八丁) (神奈川縣相模國)

長明が東海道記に曰く、松に雅琴の調べあり、浪に鼓の音ありと
息杖の竹笛を吹けば助郷の馬太鼓を打つ、彌次郎兵衛、北八の兩人
は此處を立つて行くど向ふから来るのは、お大名のお國から江戸へ
行く女中達、駕籠をつらせて四五人連れで騒ぎながら来る様子を見

「オヤ、驚氣く」北「おんにコリヤ皆生きた女だ、奇妙な、なん
と彌次さん、突然え事だが白い手拭を冠ると顔の色が白くなつて、
飛んだ意氣な男に見へると云ふが本當の事か」彌「其リヤ違えなし
さ」北「宜しく」

袂から晒白の手拭を出してグツと頬冠りをすると、通行の女中は
北八の顔を覗いて皆々笑ひながら通り過ぎる。

北「何んと何うだ、今の女共が俺の顔を見て嬉しそうに笑つて行つ
たぞ、何うでも色男は違つたもんだ」彌「笑つた筈だ、手前えの手拭
を見る、木綿真田の紐が下つて居らア」北「オヤ、こりア手拭デア

ねえ越中禪であつた」

彌「手前え昨夜風呂へ這入る時、禪を袂へ入れて、それなりに忘れ
たは可笑い、今朝洗顔をつかつて顔もそれで拭いたらう、汚ねえ男
だ」北「然うよ、道理で悪臭い手拭だと思つた」

彌「ナニ全體手前えが怒だから斯んな耻をかくのだ」北「何故」彌「木
綿を締めるから手拭と間違へるワ、コレ俺を見る、何時でも絹の禪
だ」

北「屋根屋が長局の葺きかへに行きアしめえし、絹を締る事もある
めえ、エ、まゝ、旅の耻はかきすてであるわ」

手拭と思ふてかふる禪はさてこそ耻をさらしなりけり

それより兜石を見て彌次郎兵衛

誰がこゝに脱捨て置きし兜石かゝる難所に降参やして

斯くて山中の建場も越へ、長阪大しぐれと云ふ處の邊りから、同

じく向ふへ行く旅人一人、紺の合羽を着て小さな柳行李を肩に掛け

ている男、兩人の者と後になり先きになりしていたが

男「貴郎方は何處でございます」彌「私ちは江戸だ」男「私しも江戸で

ございりますが、貴郎方は江戸の何處でございます」彌「神田さ」

男「神田には私しも永らく居りましたが、何だか貴郎方は何處かで

お見掛け申しました様に思ひます、神田は何處で」

彌「神田の八丁堀で私ちの宅は枋面屋彌次郎兵衛と云つて、間口が

二十五間、奥行が四十間、角屋敷の土蔵造りで大層なものよ」男「ハ

ア其の裏でございませうか」

彌「飛んだ事を云ふ、裏店は無え、私ちの處一軒で住つて居りま

す」

男「ハ、アそんなら總地代で估券は幾何」彌「估券は千八百兩」男「貴

郎直接でございませうか、口銭は何朱でも二ツ割にいたしませう」

彌「お前え何を云つている」男「私しは又地面の賣買のお話しかと存

じました」

彌「ナニ其んな事デアねえ、私ちア一寸出るにさへ供の五人や十人

は連れて歩行やすが、それデア氣が詰つて面白くねえから此の男を

一人連れて歩行のも好事だね」

男「なる程左様でござりませう、イヤ又貴郎のお母様なぞは私し能く存じて居りますが、何時ぞや浅草の門跡様の前でお目に掛りました時、何にか包みを提げて杖にすがつてござる様子、大きにお歳がよりました」

男「ハ、アそれは大方寺参りにでも行かれた時でござりませう、お前え御存じとあらば定めて何とか言葉をかけられたでござりませう」

男「私しを見ると直さに驅けてござつて、何を被仰るかと存じましたら、何うぞ一文やつて下さいませと……」

北「ワハハ、ハ、ハ、」

男「いやお前え俺を妙に冷嘲すな」北「面白いく、何んと今夜私と一緒に泊つては何うだ」

男「そりア宜うござりませう」

これから此の男と道連れになつて、互ひに洒落あいながら國澤と云ふ處へ來たり、此國澤の法華寺と云ふ寺は足利將軍の建立の七面堂がある、彌次郎兵衛遠くより七面堂を拜みて

足利の武將の建てし名にめで、七面堂と云ふべかりける

二人は開つ語りつ話しながら早や市の山へ來たり、すると此處に總栗頭の小僧二三人、一匹の大きな籠を捉へて持ち歩き遊んでゐ

る。

北「こゝろ彌次さん宜い物がある、あの籠を買ひ取つて晩に宿屋で喰つては何うだ」

彌「宜からう……なんと小僧、其の籠を俺に賣らねえか」子「要るならあげますが、其の代り錢を呉れるか」彌「遣らうともそりや大きな錢を遣るぞ」

四文錢を二十四文ばかり抜いて遣つて、四邊の葉を拾つて例の籠を藁苞に入れて引提げ、北「奇妙く」彌「此奴つア面白い、時に大分日も傾きかけたから些と急ぎませう」

足早やに此處を立去つて、入相の鐘の音に驚き、晩鴉時に急ぐ頃

漸やく三島の宿へ着きにけり。

三

島

(沼津へ一里半)

(静岡國縣)

立ち並ぶ兩側の宿屋より呼び立てる女の聲、女「お泊りなさいまし」
「彌」エ、ツ引張るな、此處を放したら泊つて遣らう」女「そんならさアお泊り」彌「アスカベ」

逃げる途端にドツと按摩に行き當る、按「ア痛ツくく、眼が潰れらア箆棒奴ツ、按摩けんびきイー……」

北「もう宜い加減に此處へ泊らうか」女「さアお這入りなさいまし、お三どんお泊りだよ」享「これはお早うございます、してお連れ様は

お農人……」彌「影法師共に六人」亭「へ、お三は居ないか、お湯を取つて来い、お茶は沸いてあるか、それ先づお茶を一つあげい、お風呂も沸いたから直ぐにお這入りなさいまし」
 間もなく三人共足を洗つて直ぐ奥へ通る。女「お湯をお召しなさいまし」彌「どれお先さへ参りませう」
 裸體になつて奥の方へ駆け出すと、女「モシ、あの其處は雪隠でござります、此方へ……」彌「ホ、これは……」間諛々々しながら湯殿へ這入る。

男「時にあの例の藁苞は……」北「ちやんと床の間へ置きましたから後の寝酒に料理へて貰ひませう」

其内彌次郎兵衛も湯から上つて来たので、北入と彼の男打連れ立つて湯に入り、宜い氣持ちになつて上つて来る處へ、宿屋の亭主宿帳を持つて其れへ這入つて来た。亭「御免下さいまし、何うか宿帳をお願ひ申します、貴郎方のお國は……」

北「はい私しは泉州」亭「へえ泉州は何處でございます」北「泉州堺で天川儀平と云ひます」

亭「へえ、して貴郎は」彌「私かい、私は城州山崎村與市兵衛と申しませう」

亭「扱ては與市兵衛様とは貴郎でございましたか、して貴郎の御儀勘平様は何うなさいました」

彌平は三十になるやならず死しました」亭「ハ、ア左様か、其れは嘘うそお力落し、お輕様は」彌「随分達者で居かます」亭「そして狸たぬきの角兵衛様や滅法彌八様はたしか貴郎の御近所であつたと思おもひますが」

彌「左様々々」亭「あの又猪は何處どこに居かられます」彌「はア何處どこだか」

亭「テンツルくテンツルテンは何ういたしました」

亭「ハ、ハ、ハ、貴郎は」男「私わたししア江戸の兩國で、金物屋十吉と申まします」

亭「有難うござります、今御飯を差しあげます」

彌「忌々しい結句彼方に遊あそばれた」

然さう斯かうする内女中の酌しやくで夕飯ゆふめしも濟すませ 北「時にお女中、此處こゝに

ア女郎じやうらうはないかい」

女「藝者げいしやはござりませんが、先日追分おひだわのわけから來た女おんなが二人ふたりござります

お淋さびしければお呼びなさいまし」北「然さうか此奴こゝいツア面白おもしろからう、で

標緻めいぢは」

女「餘り宜い方ではございませませんが、まア十人並じゅうにんならでございませう」

北「ハ、ハ、ハ、十人前の飯盛めしもりか、面白い呼よんで呉くんな」女「はい畏かしこま

りました、只今ただいますぐ呼よんで參まります」

云いひ捨て、女おんなは立たつて行く。

北「お前まへえさん何どうだね」十「いや私わたししは宜敷よろしうございます」

云いつてゐる内うちに宿屋やどやの女中ぢやうちゆう再びまたそれへ這入はいつて來た。

女「あの只今の女が参りました、さアお二人共お這入りなさいよ」
と襖の影から覗いてゐる女を中へ引張り込む、見ると一人の女は紺
の木綿に剣かたばみの紋の付いた着物を着し、太い縞の帯を締め、
今一人は紅殻色の赤糸の入つた堅縞の布子に、これも帯は太縞の木
綿に天鵞絨打合せの帯を締め、紅木綿の湯巻をチラ／＼見せて、黒
羅芋の長い煙管を手にとって其れへ座る。

北「サア／＼此處へ來なせえ、時に姉さん、一寸と一杯飲まして呉
んねえ……」

女「はい畏まりました……」

間もなく一寸とした酒肴が出る、應て一杯飲んで仕舞ふと、女中

は静かに片付けながら

女「もうお寝みなさいまし……」

十「では私し丈けは次の間へ寝みませうよ……」

黒「ナニ一緒に此處へ寝たつて介意はねえ、さアお前方も着替へて
寝な」

と座敷の中へ三ツ蒲團を並べて寝て仕舞つたが、早や其夜も何時更
け行きて、犬の遠吠夜廻りの鳴子、吹き來る夜風は身に沁むばかり
四邊はシーンと寝静つた、此時床の間に置いてあつた晝間のスツボ
ン、葉苞を食ひ破つてソロ／＼匍い出でゴソリ／＼と匍ひあるく物
音に、彼の十吉は眼をさましてハテ何んだらうと考へているうち、

スツポンはソロ／＼北八の蒲團の中へ匍ひ込んだから、流石の北八も吃驚りし目をさましました。

北「誰れだ／＼」

頭を擡げるとスツポンは狼狽へたか突然北八の胸の上へ匍ひ上らうとする。

北「キヤツ」

と云ふなり夢中にスツポンを掴んで向ふへ投げ出すと、彌次郎兵衛の寝て居る顔へバツタリ當る、これも同じく「キヤツ」と云つた儘慌てゝそれを引摺んだ途端、スツポンは苦し紛れに彌次郎兵衛の指先きに噛み付いた「ア痛ッ……」

大聲に怒鳴つたから敵娼のお竹も目をさまし竹「やれ魂消た、何うなさいました」彌「ア痛……、早く火を點して呉れろア痛ッ……」

竹「何うなさいました」

探りまわす手先きに冷たいスツポんがさわつたから竹「キヤッ」

背後へ打つ倒れる拍子に襖が外れてばつたり隣りの間へ轉がり込んだ、北八も驚きながら無暗にバチ／＼手を叩く。

北「彌次さん何うした／＼、真暗でネツカラ判らねえ竹「お辰さん、最前からお客様が手を叩いて居られるから、早く燈火を持つて来て下さい」

「早く早く、ア痛ッくくく」

「バタ／＼狼狽へ騒いでいる真暗闇。この時彼の十吉と名乗る男は手早く蒲團の下に敷いてあつた彌次郎兵衛の路用の金を盗み取り、豫て拵らへてあつたものと見へて石塊の紙に包んだのを摺りかへてそれを胴巻に納め、元の如く蒲團の中へ押し込んだ。」

全體此の十吉と云ふ男は道中を稼ぐ騙兒で、何時の間にか彌次郎兵衛が金子を持つているのを見付け、途中から途連れになつて此の金子を盗み取つたのだ。

そのうち宿屋の女房燈火を持って来たからそれを行燈に移して圓邊の様子を見ると、彌次郎兵衛の指にスツボンが噛み付いて、振つ

ても何うしても一向放さない、女房は慌て、

女「オヤ／＼／＼、何うして此處へ斯んなスツボンなぞが来たのだらう」

北「いやこりあスツボンか、ウ、ア晝間持つて来た奴が葉苞を喰ひ破つて匍ひ出したのだな、こいつスツボンと抜けそうなものだ」

「エ、洒落どころちアねえあれ血が出る痛い／＼」竹「何んだと思つたらスツボンだね、もし其れなら水の中へ入れると直ぐに放して逃げ出します」

女「ほんに然うしなさいまし」

雨戸を明けて呉れたから彌次郎兵衛、手洗鉢の中へ手を入れると

スツポンは指を離れて泳いでいる。

彌「ヤレ〜飛んだ目に遭つた。」

北「いや早や奇妙奇天烈、妙不思議、言語同断な事であつた、ハ、ハ、ハ、」

其の邊りを取片付け、まだ夜明けにも間があるからと云ふので再び寢床に這入つたが北八は可笑さ半分に

よねたちと寝たる側にはスツポンも

はづかしいやら指を咬へた

同じく彌次郎兵衛も痛さを堪へて

スツポンにくはへられたる苦しさに

こちや石龜の地團駄をふむ

其内早や夜も明け放れて、曉の鐘の音響き渡り、鶏の聲高く聞へると、一同起き出で、勝手から運ぶ朝飯を喰つていと、宿の女中

女「オヤお一人のお方は何藏へお出でになりました」

北「ほんに十公は何うした」

彌「大方雪隠だらう先さへ喰つて仕舞へ」

ムシヤ〜飯を食つている、十吉は何時の間にか裏口を明けて田甫途を逃げ去つた後であるから、何時まで経つても歸つて来る氣遣ひはない、彌次郎兵衛は四邊を見廻して不思議そうに彌「はて合點の行かぬ、あの野郎の風呂敷包みも笠も無え、大方俺等が寝ている

うち立つて仕舞つたと見へる 北「やア其んなら何ぞ無くなりアしねえか」

其處らを見廻して 北「何も別條は無え様だが」

云つてゐる内に彌次郎兵衛 彌「イヤ〜別條がある様だ」

胴巻を取出して振つて見ると、紙に包んだものがばたりと落ちる 見ると金にはあらでスツかり石塊。

彌「オヤ〜〜」北「ド、何うした彌次さん」

彌「何うした處か金が石になつて仕舞つた、ア、ア、」北「エツ金が石に……、此奴つア大變〜」

彌「口惜しい今の野郎奴にすり掛へられた、これ女中、御亭主を呼

んで呉んな早く〜」

無せうに逆上かへると女は急ぎ立つて行く、此様子を聞いて宿屋の亭主も大きに驚き、寢衣のまゝそれと駆け来り 亭「エ、只今承りましたが、さて〜飛んだ事でござります」

彌「いやお前え御亭主だな、コレ濟まねえぞ〜、那んな騙兒に宿をかすからにア、お前えも上臈を取つたらう、何故俺等に沙汰なしで先さへ立たせた」

亭「コレハ怪しからぬ、私しの方では貴郎方のお連れ様だと思つて泊めたので、今朝立つたのは薩張り存じません、大方裏道からでも……」

彌「裏口からも凄まじい、そんなで胡魔化されるのぢやねえぞ、な
んでも彼でもあの魔兒を出せ、これ俺を見損なつたか、お江戸
でも神田の八丁堀で枵面屋の彌次郎兵衛様と云つちア、おそろく俺
が懇意な人では誰れ知らぬ者はねえが、悪く巫山戯アがると家臺骨
を叩き碎して、合羽干場の地請にするのだ、足元の明るい内さア編
兒奴を此處へ出せ、さア出せ〜」

亭「これは御難題、さりどてはお氣の毒な」

彌「なにお氣の毒な人丸様だ、いや四斗樽様が聞いて呆れらア、さ
ア四斗樽奴を此處へ出せ」

亭「なに四斗樽とは……」

彌「いやサ四斗樽を合點で泊めたからにア、貴様も一つ穴の狐だ」
亭「これは無理な、何んで私しが四斗樽を泊めませう」彌「泊めねえ
事があるものか、昨夜から今の先き迄此處の宅に寝て居たぞ」

亭「へエーアノ四斗樽が」

彌「オ、四斗樽……、いや騙兒だ〜」

北「これ彌次さんまア静かにしねえ、可哀そうに亭主の知つた事ぢ
アねえ、道連れにしたのは此方が悪い、何うも仕方がねえと諦めな
せえ」

亭「左様〜、これが私共へ來られた後の相宿ならば然う仰有る
のも道理だが、何を云ふも一緒に來られたので云は、貴郎方の御粗

相と云ふものでござりませう」

北「違えねえ、これ彌次さん、お前え然う幾何力んでも始まらねえ何うも仕方がねえ」

云はれて見ると彌次郎兵衛も、なる程と合點は行つたが扱て詰らない、ふさぎ切つて黙止込んで仕末が付かないから 北「彌次さん、マア飯でも喰ひねえ」

彌「然う云つたつて飯どころチアねえ、なんと北八斯う仕様、府中まで行けば少しア算段をする的もあるから、まア一文無しで出掛けて見様」

これから費ひ残りの錢を集めて此家の拂ひを済ませ、後に僅かば、

かりの端に錢の残つたのを便りとして早々此處を立出で、進々も彼の騙兒十吉の行邊を捜しては見たが一向知れない、斯うなると洒落も無駄口も何處へやら、たれウカ〜と歩きながら、流石は彌次郎兵衛すぐに

諺の枯木に花は咲きもせで目をこすらするとまのはい哉

北「彌次さん、そんなに力を落したもののチアねえ、斯うだ

うさ沈みある世は次第不動尊いのれるかにも無き胡麻の蠅

かく詠みて 彌「北八、俺アもう坊主にでもなり度い」

北「お前え飛んだ事を云ふ」

彌「寧ろ江戸へ歸らうか」

北「なアに歸る事があるものか、檜杓を持つてでもお伊勢様迄行つて來なさいア外聞がわるい」

彌「其れでももう空腹くて歩行れぬ」

北「はて待て、此處に江戸から托かつて來た十二銅があるから先きへ入つたら餅でも買つて食ひなせえ」

云ひながら兩人は杖にすがつておツツ歩つてくるうち、向ふの方から状箱を擔いだ人足 人「エイサツサ〜」

北「なんだ野郎の章駄天様ア見る様に、無暗と驅けて來やアがあつた」

彌「ア、羨ましい、あんなに驅ける勢ひだから、定めて飯も澤山に

食つてるだらう」北「エ、お前えも又乞食じみた事を云ふ男だ」

人「エイサツサ〜」

北「それ危ねえ、此方へ寄んな」

人「エイサツサ〜」

行違ひに状箱の隅が彌次郎兵衛の小鬚にがたりん當る 彌「ア痛ツ〜」

人足は委細介意す 人「エイコリヤサツサ〜」

彌「ア、痛い〜、何んの因果で斯んな目に遭ふのか、俺ア死たくなつて來た」北「エ、馬鹿ア云ひなせえ、それ馬が來た」彌「馬士ごん先きの驛までまだ餘程あるかい」

馬「なに直きそこだ」

馬「唯た三里二十四丁もあるだらう」

馬「エ、アア、」

段々辿り行く内釜ヶ淵と云ふ處へ出て來たが、斯んな中でも好きな道であるから又も一首詠んだが、何しろ身の苦しさに歌も其儘だ。

名を聞いて欲しや黄金の釜ヶ淵口に孝行したきゆへには

此處で少しばかり餅を買ひ、それで腹の虫を養なつて互ひに力をつけながら漸やく沼津の驛に着きてける。

沼

津

(原へ一里半)

(静岡國駿河國)

喃う彌次さん此處で一息み仕様と驛外れの茶店へ這入つた。女「お早うござります、オヤお仕度でもなさいませんか」北「イヤ仕度は要らない、後の建場でウンと云ふ程食つて來ました」

云つてゐる内に兩掛けを人足に擔がせ、田舎風の太髻に、小紋の打割羽織を着た武士、ズツと此の茶店へ這入つて來た。

女「お茶を一つお喫りなさいまし」

武「モウ何時だ」

女「ハイモウ八ツでもござりませう」

武「然うか、宜い酒があれば少し出して呉れ」

女「ハイ、アノ三十二文のを差あげませうか」武「三十二文……今少し安いのは幾何だ」

女「二十四文のもございます」武「然らば其二十四文の酒を三十二文の酒とを等分に交せて一合五勺ばかり出せ」女「ハイ畏まりました」直ぐにそれへ酒を出し、肴の煮付などを添へて来る 武「コリヤ、此の煮付の肴は價何程ヂヤ」

女「三十二文でございます」武「此方は」女「十二文」武「然うか、イヤ宜しく、コリヤ傳助、其方も一つ飲め」

傳「ハイ有難うござります」武「サア傳助、今少しある様だ、残らず

飲んで仕舞へ」傳「有難うございます」

武「サア勘定をいたさう幾干だ、コリヤ、此の肴は手を付けないぞ」

女「ハイ、アノ四十二文でございます」武「宜い宜い」

供の者に錢を支拂はせて此處を出て行く、彌次郎兵衛北八の兩人は茶ばかり飲んで立ちあがり 北「サア行かうか」彌「アイお世話でありました」女「誰方も能くお出でなさいまし」

これより此處を立出で、兩人は彼の武士と後になり先きになり、いろ／＼話しながら辿り行くうち、奈良の阪と云ふ處の千本松原へ来ると北八

この景色見ては休まにやならの阪いざ煙草にや千本のまつ

かくて彼の武士は此の歌を聞いて感心し 武「ヤア出来たく、御

身達は江戸の者だナ」 北「左様でございます、私共は昨夜の泊りで胡

麻兒に取りつかれて大きに難儀をいたします」

武「ハ、ア其れは近頃氣の毒ヂヤ、なる程胡麻の蠅のさしたのは痛からう」

北「イヤ胡麻兒と申しますのは泥棒の事でござります」

武「泥棒とは何ぢや」

北「ハイ泥棒と申すは盜賊の事でござります」

武「ハ、ア、では何か、人の物を無斷取る盜賊の事を泥棒と云ふの

か」 北「左様でございます」

武「ソノ又泥棒を胡麻兒と云ふのヂヤナ、成程判つた〜」

北「時に旦那へ些とお願ひがござります、私共は右の泥棒にあい

まして薩張り路用を盗られて仕舞ひましたから、大きに難儀をいた

します、府中まで參れば如何様ともいたしますがそれ迄の處に困り

ます、そこで財寶は身の差し換へとやら、何うぞこれを賣り度うご

ざいますがお買ひなすつて下さいませぬか」 腰に提げて居た印傳の

巾着を出して見せた。

武「お、ウ其れは氣の毒ぢや、途中で物を求めるは如何しいが、お身達の難儀とあらば求めて遣はそう、價は何程ぢや」

北「ハイ三百位ひで差あげませう」

武「それは高い」北「チャ少しはお負け申しませう」

武「然らば斯うと……、エ、六十文遣はそうか」北「其れは餘まり」

武「六十一文遣はそうか」

北「モウ少しお買ひなすつて下さいまし」武「然らば六十二文遣はそ

うか」北「イエ何うも」武「さらば清水の舞臺から飛んだと思つて六十

三文遣はそうか」

北「イヤモウ其んな一文づゝお買ひなすつては御相談が出来ませぬ

斯ういたしませう、丁度にお買ひなすつて下さいまし」

武「丁度とは何程ぢや」

北「ハイ丁度とは百になつた事を丁度と申しますので、百文なら差

しあげませう」

武「ウム何か、百の事と丁度と云ふか、然らば丁度に求めて遣はそ

う」

北「それは有難うございます」

巾着を渡して百文受取る 北「モシこれはお安い物でございます、

捨賣にしても根付ぐるみでは四五百の物はござります」武「イヤ身共

は忤が兩人あるが、これは總領への宜い土産になる」

北「へエ貴郎はまだお若うお見へなさいますに、お子達がお兩人と

は宜いお楽しみでございます。無駄ながらお幾つでござりますか」

武「ハ、ハ、ハ、當て、見い」北「貴郎様は斯うつと……エ、三十七八にもおなりなさいますか」

武「身共當年巳の年で四十二才に罷りなる」

北「へエそれはお若かうございませす」武「それは御挨拶だ、しかし身共が相役の園原作野衛門、米木津甚太夫など皆同年であるが、其内で身共が一番若い」と云つてゐる」北「左様でござりませうとも」

武「それに又家中うちの若い女共が、身共の事を澤村宗十郎に似て居るなぞと申す」

北「ハ、ア成程」

武「時にお手前は幾つぢや」北「旦那、お當てなすつて御覽なさい」

武「ウム、お手前の年か、斯うと二十七八にもなり居るか」北「イエ丁度でございませす」

武「ナニ丁度、アノ百か」

北「イヤ」指を三本出してこれでございませす」武「ハ、アい男だ」

皆「アハ、ハ、ハ」

此の話しに引紛れて歩くともなしに大諏訪小諏訪を打過ぎ、程なく原の驛に着く。

原

(吉原へ三里大丁)

(静岡國駿河)

彌次郎、北八の二人は此處で彼の武士に別れて彌次郎兵衛

まだ飯も食はず沼津も打過ぎてひもじき原の驛に着きけり

北「エ、お前も又其んなしみつたれを云ふワ、今の錢で蕎麥でも食をう」彌「其ア宜からう〜」早速蕎麥屋へ這入り 北「オイ二膳頼みます」

男「ハイ畏まりました」

聽て蕎麥を二つ出して來た。

彌「太てい蕎麥だ、喰ひ出があつて宜いわい、北八モウ一杯かへ様か」

北「イヤ〜然う一度に錢を遣つてはならぬ、又先さへ行つて何か

食をうから、湯でも思ひ切り飲みなせエ」彌「其んなら若い衆、湯を一つ呉んな」

男「ハイ〜」

彌「ア、美味エト〜、北八飲まねエか、オイ〜モウ一杯呉んな、オット、熱ッ〜〜口を火傷した、餘まり熱い、何うぞ蕎麥を些とうめて貰ひ度エもんだ」

彌「コレ〜若い衆、度々氣の毒だが藥を服むからモウ一つ湯を呉んな」男「ハイ〜」

北「コウ澤山だよ、オツと宜し〜、しかし私が服む藥は醬油の這入つた湯でなければ効かねえから、一層の事に醬油をすこし差して

吳んナ、オツと宜しく」
鮎が水を呑む様にガブ〜飲んで 北「サア行う」 大分心丈夫になつた」

今食ひし蕎麥は富士ほど山盛りにすてし心もうきしまが原
それより新田と云ふ建場へ来た、茲は鰻が名物で家毎に煽ぎ立てる蒲焼の匂ひに兩人は鼻をヒコ〜させながら

蒲焼の匂ひを嗅ぐもうとまじやこちら兩人はうなんぎの旅

聽て元吉原も過ぎ、柏橋と云ふ處へ来た、此處は富士山が眞正面に見へて、裾野第一の絶景だ、彌次郎兵衛取敢へず

餅の名の柏橋とて旅人の足をさすりて休みやすらん

吉

原

(蒲原へ二里廿五丁半) (静岡縣駿河國)

旅人の姿を見るより棒鼻の茶屋女はいづれも黄色な聲で 女「お休みなさいまし〜、お酒お飲りなさいまし、米の飯をおあがりなさいまし、蒟蒻も葱のお吸物もございます、お休みなさいまし」

駕籠は宜いかな駕籠〜」

士「旦那様、馬ア何うだ、戻り馬だから安いよ」

馬「今迄馬は乗りづめに乗つて来たから、之から少し歩行ませう」

士「轉びやせうが聞いて呆れらア」

此の障外れに破れ編笠を着たる浪人風、扇を一本持つて 混「いや

く酒を飲みまじよ。さてお肴は何々ぞ、ころしも秋の山草、桔梗
かるかや、われもかし紫苑と云ふは何やらん、道中病氣ひまして難
義をいわします、何卒路銀の合力を願ひます」

北「イヤモウ私ち等ア昨夜胡麻兒に路用を取られて一文なしだ、何
うぞ貰ひ溜があらば此方へ御合力を願ひます」

「そんならコレ付くなく」

早々に行き過ぎ、それより久澤の善福寺と云ふ寺で曾我兄弟の石
碑あるを拜みて北八

今曾我に奇縁を結ぶ吾々は他に一家も一文もなし

此處を過ぎて富士川の渡船場で彌次郎兵衛

行く水は矢を射る如く岩角に當るを厭ふ富士川の船

この渡しを越へた時は、日も早や西山に入らんとしておのづから
道も早くなり、馬士歌に謠ふ雀色時、漸やく蒲原の驛に來た。

蒲原 (由井へ一里) (静岡縣駿河國)

此の驛の本陣へは今大名の着いたと見へ、勝手元は膳の出る最中
で大騒ぎ、北八はこれを外から覗いて見て

北「コウ彌次さん、一寸と此の風呂敷包みを持って居て呉んナ」
「何うする」

北「イヤ些との間だ」

北八は彌次郎兵衛に包みを渡して置いて御本陣の中へソツと這入り、勝手元のドサクサしてゐる中へ這入つて片隅の方へ眞面目で坐ると、本陣の女は段々膳を持ち運んで大勢の者に据へている。

北「オイ女中、此處へも一つ」
女「ハイ〜」

同じく其前へ膳を一つ据へた、處が斯んな混雑の中だから誰れ一人気の注ぐ者もないから、皮子の兎と北八は鱈腹食つて、女中の隙間を見て手拭を擴げ椀に盛つた飯を一膳これに打開けて其手拭に包み、纏てコソ〜と戸外に逃げ出し間諜〜してゐると、彌次郎兵衛は向ふの軒下に待ち退屈して

彌「北八か」北「オ、〜」

彌「何處へ行つて居た」北「へ、エ、俺ア飯を食つて來たが奇妙だらう」

彌「エツ何處で」北「本陣でア、ドサクサ紛れに五六杯やらかして來た」

彌「其レア好い事をした、しかし手前エも實の無え者だ、何故俺も連れて行かねえ」北「イヤお前エにア土産を持つて來た」手拭に包んだ飯を出して遣る。

彌「何んだ飯か、有難てえ〜、イヤ却々手前エ氣が利いて居るわい、ア、美味い〜」

見る間に残らず飯を食つて仕舞ひ、手拭をうち振つて 唄「オヤこ
れは手拭に包んで来たのだナ、エ、汚ねえ」

北「ナニ汚ねえものか」唄「それだつて手前エが翠玉や何かを洗つた
手拭だもの、ア、胸が悪いベツ〜〜」

北「ハ、ハ、ハ、時に村外れへでも行つて木賃と出掛け様」

と打ち連れて此の驛の棒鼻へ出て其の邊りを間諷付きながら 唄「コ
ン北八、何うか意気な女のある家へ泊りてえナ」

唄「ナニ木賃で泊める家に意気も瓢箪もあるものか、ハナ何處だか
判らねえ」

彼方此方の家を覗いている内、何うした拍子か軒の下に寝ている

犬の足を踏んでワンと喰ひ付かれ 北「アツ痛ツ〜〜」キヤン

唄「鱈の酢いッ、鯖の酢いッ」北「コウ酢屋さん、此の邊に何處か木
賃宿はねえか」

北「木賃宿は向ふの端の家よ」

唄「何うもお邪魔」と教へられた家の門口へ来て

唄「オト御免なせえ」

スツと這入つて来て見ると、畳の四五畳も敷かれ様と云ふ家で
佛壇一つと破れ葛籠一つの財産、これ丈で主人が見へるのは若
にもならうと云ふ老爺、圍爐裡の側で縄をなつている、自在鉤で吊

した鍋の中で何かグツグツ煮へている、其側には六十六部が一人、
順禮が兩人、順禮の一人は六十才位ひの老爺で一人は十七八才の娘
笈を着た儘垢切れたらけの足を投げ出し、圍爐裡にあたつて
此處の婆アは松の枝を折つて圍爐裡の中へ燻べながら 婆「此方へお
這入り」

北「私ら等を今夜泊めて呉んねえ」

婆「サアお上り、ソレ其處に水があるから足をお洗ひなさい」北「オ
ツと宜しく」

足を洗ひながら北八 北「彌次さん見ねえ、宜ひ順禮が泊つてい
る」

彌「ホンに此奴ツは其儘ちア置かれねえ、空腹い時にア無味ものな
しだ」笑ひながら足を洗つて上へあがる。

婆「サア此處へ来てお暖り」

北「コウ彌次さん、モウ些と其方へ寄んなよ」

無理やりに娘の側へ割り込んで坐る、其内婆アは圍爐裡の鍋をお
ろして 婆「サア粥が出来た、皆んなお喰り」彌「オツ其れは暖かひ宜
からう」

婆「イ、やお前さん方の事ちアありません、是りア此の人達の粥だ
よ」彌「オヤ〜」

順「イヤ今日貰つた米は澤山あるが、半分は砂が交つている、もし

これを喰つたら腹が重くなるかも知れない』

『六部さんのも三合ばかりは有つただらう、其處で別けて喰べなさい』

云ふ内六部も順禮も手ン手に茶碗を持ち出して粥を食つていゝが何しろ出し合ひの米で焚ひた粥であるから、彌次郎兵衛北八の兩人はたゞ手持無沙汰で、煙草入れの底をハタクばかり、六部は臆て食ひ終ると茶碗を仕舞つて、六二人の衆は定めて江戸のお方だらうが私共はお江戸で飛んだ目に遭ひました』

『へエ、何うしなすつた』

六『私が此の六部なぞになつた因縁をお話し申しますが、さて』

人間と云ふものは運が無くチャ何うしても頭はあがりません、私も若い時分には江戸に住んで居りましたが、其時何でも夏から秋にかけて毎日、甚く大風の吹いた事がありました、其時に私ア何でも金儲けを仕様と思つて、いろく首を捻つた上旬、飛んでも無い事を思ひ付きましたので』

彌「ハ、ア」

六『他でも無い箱屋を始めました、重箱だとか櫛箱だとか種々な箱を一時にウンと買ひ込んで、これを賣る心算でございました』

彌「ハ、ア、風が吹いたからつて、箱屋を始めたとは何う云ふもので』

六「其處だて、私が思ひ付いたのは何しろ毎日、途方もない大風が吹いて、お江戸では大變に砂埃りが立つから、自然と人の目の中へ其の砂埃りが吹き込んで、其のために眼を悪くして眼が潰れる者が澤山に出来るだらうと思つたから、そこで私が工風をして、俄盲目が他にする事もなし、皆な三味線を習ふだらう、そうすると急に三味線屋が繁昌をして世界の猫がその皮を取るために殺されるだらうから、そこで鼠共が暴れまわつて世間の箱と云ふ箱はスツカリ嘴つて無くするに違ひはない、此處で箱屋をしたら賣れる事は間違ひ無いと思つたので、財産を有りツ切り箱類を仕入れたと思はつしやう」

「成程是リア宜い思ひ付きた、デア大分賣れましたらう」

六「處が一つも賣れません、そこで私も是れ迄に考へて是非儲け様と思つてした事が目的が外れたので、これは何うしても運が無ければ駄目だと發起して六十六部になつたのでございますが、兎角世間は思ふ様にならない物でございます」

「ハ、ア其リア感心な話した、時に又順禮さん、お前エ方は何う云ふ事から思ひついて順禮に出なすつた」

「是れは何うも、デア私も序でに懺悔話をいたしましたせう、此の娘は私しの唯た一人の孫でございますが、私し共は變つた事で佛縁を結びました、私しは日光の方の者でありますが、定めて貴郎方

も話しにお聞きになつてございませう、私し其の國はそれはいくく雷
 が澤山にあつて、此の二十年ばかりも跡の事でありましたが、或る
 夏の日甚く雷が鳴つて、私し方の裏口へ雷が落ちました、そう
 すると其雷が榎の木の間株で非常に尻を打つて、疝氣が起つたと
 云つて大騒ぎをして居ります。そう云ふ譯で其時は天竺へ歸る事も
 出来ないから、私しも可哀そうに思つて宅へ引取つて介抱をしてい
 る内、耻を云はねば理が聞へないと云ふので、私しも耻しながらお
 話し申しますが、その雷どのが如時の程にか私しの娘と宜い仲に
 なつて、互ひに離れる様子もございせんから、直ぐに其雷ど
 のを娘の聲に迎へました、處が夏の頃になると天竺の親方殿から夕立

の時分し手傳つて呉れと云つて、夏の間はベツタリ頼まれて行つて
 居ましたが、或る夏にフト上方の方へ稼ぎに行くと言つて出たきり
 で何時迄歸つても歸つて来ません、ところが丁度其時娘は子を孕ん
 で居るし、心配しない事か、大方何處かへ落ちて腰骨でも打ち砕い
 て病氣つても居るんだらうかとは思つたが、何しろ雲を掴む様な
 尋ね物で、便りを聞く事も何うする事も出来ない、是リア何うした
 ら宜からうと思つて居るうち、或る日其の友達の雷どのが來ての
 話しに、此處の聲殿は紀州熊野の浦へ落ちて鯨に吞まれて仕舞つた
 と云ふ話し、ヤレ／＼悲しい事だと娘も泣く私しも片腕もがれた様
 に思ひましたが、然うだと云つて今更ら仕方がない、其の代りにア

娘が雷どの、胤を孕んだのだから鬼の子でも生むだらうから、其
 子に親雷の跡を継がせ様と楽しんで、何んでも彼でも鬼の子を生
 む様にと氏神様へ願をかけて祈つて居た處が、因果な事には其の生
 れた子が此の娘でございます、そこで私共は大變に力を落して、
 これ程神様へ祈つたのに鬼の子は生まず、然も斯んな満足な人間の
 子を生むと云ふはよくくの因果だと諦らめてその罪ほろぼしに、
 此の孫娘を連れて順禮を思ひ立つたのでございしますが、私し程因果
 な者はないと思ひますと、話しをするさへ胸が潰れます』
 涙ながらに話しをするうち、大分夜も更け渡つて来たから、婆ア
 はそ〇くに床筵などを渡し、婆ア皆んなお寢みなさいまし、老

が狭いから妾しと順禮の衆は天井へあがつて寢みませう』
 九ツ梯子を二階へ掛けて順禮の娘を連れてあがる、六部は笈の
 中から紙帳なぞを出して冠り、其儘横になる。
 主人の老爺と順禮は薄い蒲團の様なものを引張つて圍爐裡の側へ
 寝る。
 北「こリア小便が漏る様だ」
 男「俺も一緒に行かう」
 二人ながら裏口へ出て、男「俺アアノ娘をぶつちめ様と思つたら二
 階へ上りアがつた、忌々しい」
 北「俺ア先刻から話しをしているうち、密と手を握つたり尻をつめ

つたりしていたのだがお前エは知るめえ」

「嘘をついてやアがる」

北「嘘なものか、今夜那の娘の處へ行つて見様」

「然うか、早い男だ」

内裡へ這入つて兩人ながら其處へゴロリ横になつて寝る。

斯んな木賃宿に泊るも話しの種とは云ひながら、ツイウツ／＼して
ているうち、隙もる風に更け行く鐘の音を送つて不圖目をさました

例の北八、四邊の様子を考へて見ると、皆旅疲れと見へて軒の掛合

皆「ゴウ／＼、スウ／＼ムニヤ／＼」

時分は宜しと思つた北八、密と起き上つたが何しろ燈火は消へて

眞の暗、そこらありたを探し廻しながら漸々と梯子に取りつき、二
階へツル／＼上つて來ると天井は竹の簀の子で、其の上に筵を敷い
た儘であるから、歩く度毎にミシリ／＼と鳴るから驚いた、懸て四
ツ這になつて探り廻り、暗がりの中を娘と思つて婆アの寢床に這入
つたから、驚いたのは例の婆ア「誰だツ、何をするツ」

怒鳴り立てられて北八吃驚仰天「北八は門違ひだつたか失策つ
た」

と逃げ出す拍子に足の裏へ竹のトグを立て、バタリ打ち倒れると竹
の簀子を踏み抜いたから堪らない、バリ／＼／＼ツがら／＼／＼ズ
ドーン、老爺は此物音に目をさまし「誰何んだ」

「何んだか知らないが途方もない、皆な起きて下さい〜」
 此の聲に順禮も六部も其れと起き上り、驚きながら六「甚い音が
 した、燈火を早く點けい〜、眞暗で何んだか彼だか薩張り判らな
 いぞ」

ところが茲に一人怪しいのは北八で、天井を踏み抜いて下へ落ち
 たのだが、其の落ちた處が箱の中の様で一向何んだか判らない、足
 へコロ〜と何か引掛るから、ハテ何んだらうと探つて見ると佛様
 の香爐だ。

北「ヤツ儲ては佛壇の中へ落つたのか」
 と可笑さ半分此の間に駆け出さんとするうち、外では早や燈火を點

したから出る事も出来ない。

老「オヤツ何んだか佛様の中へ落ちた様だぞ」

佛壇の戸を開いて見ると思ひ掛けなく北八が眞赤な顔をして匍ひ
 出して來たから膽を潰した。

老「ヒヤツ此の人は……」

北「モシ身延様へは何う参ります」

老「馬鹿ア云へツ、手前エ其處く何故這入つた」

北「イヤ私ちは小便に起きたのだが、ツイ戸感ひをして」老「ナニ月
 感ひをした……イヤ此の人は佛様の中へ小便をしたのチアないか」
 と云ひながら佛壇の中を覗いて見て 老「オヤ〜お前エ天井から落

「ちたのだナ」

北「ソ、其れは……、オ、然うく、ツイアノ猫に追はれて落ちましたので」

老「ナニお前エは鼠デアあるめえ、猫に追はれたとア何んたる事だそして何故天井へ上つて行つたのだ」

北「イヤ私ちは禪を鼠に引かれたから、萬一や二階にでも有らうかとそれを探しに……」

言譯をしてゐる内二階から婆アが下りて來た。

婆「イヤく、然うデアございません、妾しも今年六十になりますか何處の國に何をするので妾しの蒲團の中へ這び込んだ」

老「オヤく、お前エ氣でも狂つたのデアないか、私等は二十年からモウ其んな事をした事はないに、那んな婆アの處へ……イヤハヤお前さんは見度くも無え人だ」

北「イヤモウ御免なせえ、コレ彌次さん、寢た振りなどをしないで起きて呉んな」

搖り起されて彌次郎兵衛も可笑さを忍びながら「こりア何うも若い者と云ふ者は前後の考へがございません、何うぞ了簡して下さいまし」

云ふ尾について六部も順禮も共に口を添へて漸やく治まり、北八浴衣を一枚賣つて天井の繕ひ賃を少々出し、無事に事済みとなる

程なく夜も明けはなれたから、彌次郎兵衛、北八の兩人は此處を出立して行くその途次、彌北八、大分酔いでいるナ、小田原の泊りでは据風呂の底を抜いて二朱引取られ、又昨夜は天井を踏み抜いて三百取られたのは餘り智恵の無え話したぞ』北「イヤ何うも面目次第もない、忌々しいが昨夜ので一首詠んだ』

順禮の娘と思ひ忍びしはさてこそ高野六十の婆

彌「ハ、ハ、ハ、昨夜戸惑ひの言譯も可笑かつたが、禪を鼠に引かれたとは宜い故事付けたつた』

云ふ内に由井の驛に着くと兩側から呼び込む女の聲、女「お這入りなさいまし、名物の砂糖餅をお食いなさいまし、鹽辛いのもござい

ます、お休みなさいませ〜』

彌「エ、喧ましい女共』

呼び立つる女の聲は剃刀やさてこそ此處は髮由井の驛

由井 (興津へ二里十二丁) (静岡縣駿河國)

それより由井川を打越へて倉澤といへる建場へ着く、此處は鮑、螺の名物で漁人が直ぐに海から取つて來て賣る、此處で暫らく足を休めて

茲もどに賣るは螺の壺焼やみどころ多き倉澤の驛、それより薩埵峠を打ち越へ、ポツ〜行く内俄かに大雨が降り出

したから、半合羽を頭から冠り、笠を深く傾けて有名なる田子の浦清見ヶ關の風景も見る事出来ず、砂道に踏み込んだ足も重たく漸やく興津の驛にいたり。

興

津

(江尻へ一里二丁)

(駿河國縣)

此所の怪げなる茶店に立寄り 北「オイ婆さんその豆の粉をつけて團子を二三本呉れなさい」

彌「さてく久振でお前の顔を見たわ何時も達者で目出度時にこの子は幼少な時見たよりか大きくなつた姉御は達者かの」婆「私は子供は御座らない」

彌「そんなら孫か」婆「インネ子がなげや孫もない」

彌「ハチナお前の孫でなげや確か何所かの孫であつた」婆「インネ馬子ちやお座らない隣の籠屋の孫でござるわ」

彌「ハアさうかあの團子が二つ餘つたソレ喰ひな」

子「イヤダ」彌「ナゼ否だ」子「ナニ糠付た團子は否だ」彌「ナニ糠をつけるものかこれや豆粉だ」

彌「イヤ私等の所ぢや糠付て賣申す」

彌「道理でざらくすると思つたらベツベツモウ犬に遣らうよ……」
「犬わんく。」

彌「マ、おもしろいもんだ」

と残らず犬にやつて仕舞ひ胸を悪くしてこゝを立ちさる。

江尻 (府中へ二里廿七丁) (静岡河國縣)

此處へ着くと雨も漸く晴れ上つたので、彌次郎衛兵早速一句んだ。

降りくらし富士の根ふとを打過ぎて

江尻に雨の霽れあがりけり

雨もやんだから自から行き交ふ人の足も軽く、驛馬の鈴の音も勇ましく、シヤン／＼／＼

北馬士ぞん、火を一つ貸して呉んなせえ』

馬士ハ、、、お前エ方は兩人とも江戸だナ、江戸の人は氣が大きい、昨日俺が府中から江尻へ三百で乗せた旦那がお江戸の人で、宜い旦那だった、長沼迄来ると其の旦那の云ふには、江戸迄二百デア安いから酒代を二百増して遣らうその代り酒は別に此方から買つて飲ませると云つて、吉田の建場で鱧腹酒を飲まして呉れた。それから又云ふにはコリヤ馬士、お前エ一日馬を曳いて歩行て疲勞れたらう、是れから俺が下りてお前エを此の馬に乗せて遣らうと被仰るから、こりア何んたる事だ、俺ア厭やだと云つても聞かない旦那が是非俺に乗れと云つて、その代り乗賃を二百遣らうと梅の木建場から遂頭俺を馬に乗せて江尻まで来ると、興津迄馬に乗せるのだが

疲勞れたらうから馬に俺が乗つた事にして駄賃を遣らうと又二百下
さつた、そんな宜い旦那は滅多に無えものだ」

話しをするうちに此の馬に乗っている旅人、馬の上で空齎をか

く、

馬士オイ旦那危ねえ、目をさまして呉んねえ」

呼び起されて旅人は目をさまし、

旅馬が罅が明かねえから眠氣が出た、昨日三島から乗つた馬は、

宜い馬だつた、そして又其馬士が飛んだ氣の宜い男で、三島から沼

津迄百五十で價をして乗つた處がその馬士の云ふには旦那は斯んな

早い馬に乗つて今に落ち様か、イヤ滅多に眠る事も出来ないなど、

氣遣つて居らつしやるだらう、それが氣の毒だから駄賃はモウ買ひ

ませんと云つてゐる、それから三枚橋まで來ると、旦那馬の鞍で腰

が痛みませう些と下りてお休みなさい、酒でもお飲りになるなら酒

代は此方からあげませうと、馬方の方から百五十呉れて沼津へ來る

ど、先きの驛まで送つてあげたいが私の馬は跳ねますから、他の馬

に乗つてお出でなさい、駄賃は私しあげませうと、又百五十たゝ呉

れた、そんな氣の宜い馬士もないもんだ」

ど、話しをしているうちに此の馬を曳ひている馬方、歩行ながら

ゴウ／＼ムニヤ／＼空齎をかいている、彌次郎兵衛も北八も此の様

子を見て大きに興に入り、何時の間にか早や府中の驛に着いた、

府

中

(鞠子へ一里十六丁)(駿河國 今の静岡)

先づ傳馬町に宿をかりて、彌次郎兵衛が豫て知己の宅を尋ね、此處で路用を充分に借つて大きに勇み立ち、翌日此處を立つて、彌勤と云ふ處へ來た、此處は有名なる阿部川餅の名物で、兩側の茶屋はいづれも綺麗に並んでゐる、

女「名物のお餅をお食りなさいまし、五文取りをお食りなさいまし」

呼ぶ聲を後邊に聞き流して行くと阿部川の川越し人足道迄出迎へて、

人「旦那衆お上りかな」

彌「オイ貴様ア何んだ」

人「川越しでございます、安くやりますからお頼み申します」

彌「幾程だ」

人「昨日の雨で水が多いから一人前六十四文づゝ」

彌「そいつは高い〜」

人「だつてマア川を御覽なせえ」

打連れて川端へ出て來た、

彌「あら成程剛勢な水だチア落すまいぞ」

人「何に落すものか、お前さんサア其方をお向きなさい」

二人を肩車に乗せて川へザブ〜這入つて行く

北「ア、南無阿彌陀〜、目が廻る様だ」

人「確かり私しの頭へ取り付いて居なせえ、ア、コレ其んなに眼を塞ぐと向ふが見へない」

北「成程深いワ、コレ落しチア不可ないよ」

人「ナニ落すものか」

北「其れでもヒヨツと落したら何うする」

人「落した處で高がお前エが流れて仕舞ふ位ひな事だ」

北「エ、ツ流されて堪るものか、イヤモウ來たぞ〜、ヤレ御苦勞

〜

漸やく肩車から下りて賃錢をやる。

北「ソレ別に酒代が十六文づ〜」

人「へイこれは有難う存じます。マア御機嫌宜敷う」

と云ひ捨て、川越人足は直ぐ川上の浅い方を渡つて歸る様子、

北「アレ彌次さん、見ねえ、俺等をば深い處を渡して六十四文づ〜

歎して取りアがつた」

川越の肩車にて吾々を、深い處へ引さまわしたり、

夫より手越の里に至るに、又もや俄雨降り出して車軸を流す如く

半合羽を取出して引冠り、ドシ〜駈けて程なく鞠子の驛に至る、

鞠

子

(岡部へ二里九丁)

(駿河國縣)

爰にて支度せんとて茶屋へ這入り、

北「コウ飯を食ふか此所はとろ、汁の名物だの」

彌「そうよモシ御亭主とろ、汁はありやすか」

亭「ハイ今出來ず」

此地の言葉出來る事をできすと云ふ、

彌「何でえでさねえか仕舞た」

亭「ハイ直に調るにチツト待なさろ」

俄に芋の皮をむきにかゝる、

亭「お鍋ヤレ、この忙がしいに何をして居る一寸來い」

女房裏口より小供を負て來て、

女「ソレお前摺木が逆まだ」

亭「己が事より己がソリヤのりがこげら」

女「ヤレ、八釜敷人だ」

亭「コリヤ摺鉢をつかまへて呉れろエ、夫ぢや摺られない……」

女「アニお前が」

亭「イヤこのあまア」

と摺木で一つボカン、女房もやつきとなり 女「此野郎」

摺鉢を取りて投げる、とろ、四邊に散る 亭「ヒヤアうね」

向むかの神かみさんかけて来て

神かみ「ヤレチャ又見度またみたくもない静しづまりなさる」

北きた「飛とんだ手てやいだ彼のあのころゝで一首いっしゆよみやした

「けんくわする夫婦ふうふは口くちをどがらして鳶とんびころゝにすべりこそすれ

夫それより宇津うづつの山やまに差懸さしかりたるに雨あめは次第しだいに篠しのを亂みだし鷲つたの細道ほそみち心こころは

そくも杖つえを力ちからに十團子じゅうだんごの茶屋ちや近ちかくなりて彌次郎やじろう思おもはず坂道さかみちに迂うり轉ころ

ければ

降ふりしきる雨あめやあられの十とだんと轉ころげて腰こしをうつ山の道やまみち

岡部おかべの宿しゆくに着つく 宿男しゆくおとこ「お泊とまりでござへますか」

男おとこ「イヤ私等わしら今日けふ日か川かはを越こえにやならぬ」

宿しゆく「大井川おおいがはは止とまりやした」

男おとこ「南みなみ三川さんかはが支つかやしたか」

宿しゆく「左様さやうで御座ございます先まへお出いでなすつてもお大名だいのうが五組島田ぐみしまたと藤枝ふじえだに

お泊とまりでございますから貴郎方あなたがたのお宿しゆくはござりませぬ先岡部まづおかべへお泊とま

りなさいませ」

男おとこ「それならさう仕様しやうか」北きた「お前何處まへなにやだ」

宿しゆく「相良屋さがるやと申まをします直じきにお供ともませう」打連うちつれて岡部おかべにつく。

豆腐とうふなる岡部おかべの宿しゆくにつきにけり足あしに出来できたる豆まめをつぶして

先まづ此宿このしゆくにやどを取り川かはのあるまでしばらく旅たびの勞つかれを休やすめける

岡

部

(藤枝へ一里二十六丁) (駿河國縣)

名にしおふ遠江灘 浪平らかに街道の並松枝を鳴さず、往來の旅
 人は互ひに道を譲りあひ、泰平を唄ふつとら馬の小室節豊かに、宿
 場人足其帳場を争そはず、雲助駄賃をゆすらずして盲人おのづから
 獨行し、女同志の道連れ抜け参りの童まで盜賊誘拐の愁ひにあはず
 かゝる有難き御代にこそ東西に走り南北に遊行する雲水の樂しみ
 得も云はれず、茲に例の彌次郎兵衛、北八の兩人は大井川の川支へ
 で暫らく岡部の驛に逗留して居たが、今朝漸やく御狀箱も渡り、一
 番越しも濟んだ由を聞いてソコゝに支度をして旅籠屋を立出でた

か、早や諸大名の同勢、往來の貴賤は櫛の齒を引くが如く、問屋駕
 は宙を驅け、小荷駄馬は飛んで走る如く街道の賑はい勇ましく、兩
 人、共に浮かれながら朝比奈川も打越へ、八幡、鬼島、白子町も過
 ぎ、早くも燈が淵と云ふ處へ來ると、彌次郎兵衛は例の如きの道と
 て取敢へず

茲もとは鞍の燈が淵なれど踏みまたがりて通られもせず
 それより平島口、田中も打過ぎ、藤枝の驛近くなりて
 街道の松の木の間に見へたるはこれ紫のふじゑだの驛

藤

枝

(島田へ二里八丁)

(駿河國縣)

此の驛の入口にて風呂敷包みを一寸と肩に掛けたる田舎の老爺、馬の跳ねたのに驚いて逃げる拍子に北八の胸へドンと突き當つた、北八は不意をくらつてよける事も出来ない、水溜りの中へ轉んで大さに腹を立て、起き上るや否や彼の田舎老爺を引提へて
北「コノ老爺奴ツ、汝ア目が見へねえのか、寒鴉の黒焼でも喰やアがれツ」

老「コリア何うも飛んだ事をいたしました、御免なさいまし」

北「ヤイ唯御免なせえチア濟まねえぞ、俺ア小粒でもキヤツと云ふ時から金の鯨を横目に睨んで、産湯から水道の水を浴びた男だぞ」

老「イヤ〜水なら宜敷うございますが、貴郎の倒けた處は馬の小

便の溜りでございます」

北「エ、ツ此野郎、小便の溜つた處へなせ倒かしアがつた」

老「ハイそりア私しも別に貴郎を倒かす心算ではなかつたので、馬に跳ねられそうになつたから道をよけた處が、貴郎に突き當つたので、何うぞお許しが願ひます」

北「なんだ許して呉れ……、否やだ〜、假令へ大江山の親分が鐵棒引いて渡りに來様が、石尊様が猪の熊の似顔に書かせて、提灯で路次口から溝板の上へ匍へ屈んで來ても、聞かねえと云つチャ久米の平内を居催促に遣つたよりかア、まだピクともせぬ奴様だ」

老「オヤ〜貴郎は何かペラ〜と七難しい事を云つているが、私

し共は薩張り譯が別らない、私も此の近在の長田村と云ふ處で、名主も勤めた家筋だから、お地頭様の年始にア上席もする位ひの男だ其んなに悪口ばかり云ふものではない」

北「エ、ッ洒落た事を吐すな、尻が痒いワ、頭の缺でも拾はして遣らうか」

老「エ、お前は本當に無理な事を云ふ人だ、私にア荒神様がついているから滅多に負ける事デアない、餘まり大きな口を利くない」

北「エ、ッ此摺木奴ッ」

と擲らんとするから、彌次郎兵衛見るに見兼ねて漸々双方を引分け」

北「コレ北八、モウ了簡しろ、老爺さん、お前エも全體龜相をしなから氣が強い、モウ宜いから行きなせえ」

北八を宥めて居るうち、彼の老爺はブツ／＼云ひながら行き過ぎると彌次郎

頭に乗つて北八に丁叩かれし藥鐘頭の爺凹んだ

打ち笑ひつゝ、瀬戸川を越し、それより志田村大木の橋を渡り、瀬戸と云ふ處へ來ると此處は染飯の名物なれば

やきものゝ名に負ふ瀬戸の名物はさてこそ米もそめつけにして斯て此の町端の茶屋に先の田舎親仁休み居たりけるが二人を見付て呼かけ

親仁「先刻やア無禮致しやした一杯呑だ元氣で途い頓だ事を彼方が了簡ノウして無時歸村しますは先づ禮に一杯此所へ寄らつしやい」

彌「何に私等酒も呑できやした」

親仁「折角私の思だ一ツ宜からうコウく御亭味宜酒出さつしやい」

北「イヤお志は忝ないがサア彌次さん行ふ」

親父「ハテコリヤ情の無い人や」ト無理に彌次郎北八の手を取り引込む、

親父「此所は餘り入口だから大座敷へ行ふコウく肴も酒も」

女「サアく」奥へと三人は奥の方へ行く酒も肴も来る彌次郎兵衛

彌「サア親父さん始めなせへ」

親「毒見しませうヲツト……さて先づ若へ人へ進せませう」

彌「アイ私は酒よりか腹がへつた」親「ソリヤ飯を喰つしやい」

北「イヤ先づ酒に仕様ヲツト有ますく是は吸物之は煮肴いや有難

へ時に親仁さん上やせう

親「やらつやつと持て來た平は何だ玉子のふはくサア澤山飲で呉

れさつしやい其方は私が爲には命の親や先刻や好く了簡して呉さし

た。

北「コレ私も透虫の居所が悪つて言ひ過した眞平御免」

彌「そこは旦那ごんも野暮じやねへ」ト只飲む故無しやうに呑むこ

の内勝手より色々料理も出膳も出る二人氣の毒ながら食て仕舞ふ親

父立て小便に行く跡にて北八

北「コウ彌次さんアノ親仁の來ぬ内に後に飲む分もやらかそう」

ト二人は飲むやら喰ふやらたいたと思て大元氣なり、時に此の親仁

のべら作奴は如何した

北「ホンニ長い雪隠たモシ女中爰に居た爺様は何所行つたの」

女「確か表の方へ」彌「ハテ髪チキだはへ」待てどもく來らず

北「モシ女中今の親仁は此の拂ひをして行たかの」

女「イヤ未だ頂きませぬ……」

彌「ヤアくく……」北「ペタンにかけやがったな追つ掛けて打の

めそうと」飛び出したが少しも分らず、

彌次郎、北八の顔を見て彌「コウ北八手前の貌で一首うかんだ」

御馳走と思ひの外始末にて腹もふくれた顔もふくれた

北「へ、ごうはらな生馬の目をぬきやがった

有がたい忝ないと禮いふていつばい食て酒の御ちそう

斯く讀みて北八も笑を催ふし田舎者と侮て飛だ意趣返しをしら

れたるも可笑く、爰を出て行程に大井川の手前なる島田の驛に至り

ける

島

田

(金谷へ一里)

(静岡縣 駿河國)

川越しども出迎へて人「旦那衆川を頼みます」

彌「貴様川起しか、兩人幾程で越す」

人「ハイ漸と今朝がけに明いた川ですから、肩車チア危ない、運臺で遣るからお兩人で八百下さいまし」

彌「途方もねえ、越後の新潟チアあるめエし、八百よこせも凄まじい 人「そんなら幾程下さるので」

彌「幾程も摺子木も要らねえ、俺等ア勝手に越すわい」

人「オ、川流れなら二百つけて寺へやるから、何んなら然うしたが宜い、流れた方が安くて済む」

彌「ワハ、ハ、ハ、馬鹿ア吐せ、問屋へ掛つてお越しなさるのだ」云ひ捨て、足早やに此處を歩き過ぎ、

彌「何んと北八、那奴らに介意ているのが面倒だから、寧ろの事問屋へ掛つて越す事に仕様、手前エの脇差しを借せ」

北「脇差を何する」 彌「武士になるのだ」

北八の脇差しを取つて差し、自分の脇差しの鞘を後邊の方へ延し長くして大小刀を差した様に見せ掛け

彌「ナンと出来合ひの武士だが、能う似合ふだらう、此の風呂敷包みも一緒に持つて手前エはお供になつて来い」

北「此奴ツは大笑ひだハ、ハ、ハ、」

彌次郎兵衛の荷物も一緒にして北八は肩に引掛け、聽て問屋場の前まで来ると彌次郎兵衛はお國言葉の声色を使ふ

彌「コリヤ問屋共、身共大切なる主用で罷り通る、川越人足を頼むぞ
問「ハ、畏りました、シテ御同勢はお幾人」彌「ナニ同勢とナ」
問「左様でございます、旦那はお駕籠かお馬か、お荷物は幾駄程で
ございます」

彌「ウム本馬が三疋、駄荷が都合十五駄程あるが道中邪魔になるか
ら江戸表に置いて参つた、其の代り身共の駕陸尺が八人、そこへ記
したが宜からう」問「ハイ、其れでお武士衆は」

彌「武士共が十二人、槍持、鉄箱、草履取、宜いか、合羽籠、竹馬
都合上下三十人ばりヂヤ」

問「ハ、、、シテ其御同勢は何處にお出でになります」

彌「イヤサ江戸表出立の節は残らず召連れたが、それは途中で追々
癩疹をいたして居るから驛々へ残して置いた、そこで只今川を越そ
うと云ふ同勢は、上下合せた唯た二人ヂヤ、臺越しにいたそう幾金
ヂヤ」

問「へエー、お兩人なら運臺で四百八十文でございます」

彌「其れは高直だ、チト負けやれ」

問「エ、此の川の賃錢に負けると云ふ事はない、馬鹿ア云はないで
早く行くが宜い」

彌「イヤ、これは武士に向つて馬鹿ア云ふナとは何んぢや」

問「ハ、、、餘まり判らないお武士だ」彌「此奴ッ武士を嘲弄しお

る不届千萬な」

問「お前さん武士か、刀の錆を見さつしやい」云はれて彌次郎兵衛振り返り、後邊を見ると刀の錆が表口の柱に支へて鞘ばかりの處が二つに折れているから、四邊一同ドツと一度に笑ひ出す、流石の彌次郎兵衛も面目玉を踏み潰し、暫らく黙り込んでゐる。

問「折れた刀をさす武士が何處にあるものか、お前エ方は問屋場を騙りに来たのだな、此の儘ちや濟まさねえぞ」

彌「イヤ身共は三保の谷四郎俊國の末孫だから、それで故意と刀の折れたのを差して居るのだ」

問「下らねえ事を吐すと縛りあげるぞ」

北「コウ彌次さん、納まらねえ早く行かう」手を取つて引摺り出されたから、彌次郎兵衛はそれを好機にコソコソと逃げ出す。

問「ハ、ハ、ハ、途方もない氣違ひだ」

彌「ア、ツツ、遣り損なつた忍々しふ、ハ、ハ、ハ、」

出来合ひのなまくら武士の印どて刀の先きの折れてはづかし

この狂歌に双方大笑ひとなり、兩人は此處を逃れて急ぎ川端へ行つて見ると、往來の貴賤老若隙間もなく此の川の先きを争ひ、越へて行く中に兩人も漸やく直を取定めて蓮臺に乗つて見ると、大井川の水は二三日來の雨で逆まき流れて目も眩むばかり、今や生命も捨てなれと思ふばかりで、その恐ろしさ例ふるに物なく、誠に東海道

第一の大河、水勢早く小石流れて渡るにも苦しき難所、これも無事に兩人打ち越して蓮臺を下りた時の嬉しさ云ふ迄もない、あまりの嬉しさに北八、

蓮臺に乗りしは結句地獄にて下りたところがほんの極楽打ち興じながら程なく金谷の驛にいたる。

金

谷

(日坂へ一里廿四丁)(静岡國)

雨側の茶屋女右左より駆け出して 女「お休みなさい……」

駕「駕に乗つては如何じや……」北「コウ彌次さん、駕は如何じや……」

「イヤ氣が無い手前乗るなら乗つて行かしゃい……」

北「そんなら日坂まで乗ろうか……」

と賃錢を定めて駕に乗る、この時雨しきりに降り出して漸く小夜の中山につく。

此の所に駕を下り立場茶屋に入る、此所の名物として鱈の餅あり白い餅に水あめを包みて出す、二人は酒呑みであるから、いや〜ながら二ツ三ツ喰べて居る雨はますます強くなつて来た。

爰もとの名物ながら我々は降り出すあめのもち餘したり

此の寺に昔より、むげんの鐘と云ふがあつたが今は無くて其名のみ残つて居る。

この寺にむげん鐘もつきなくし今は晦日に空やつくらん

日坂 (掛川へ一里十九丁) (静岡國)

それより日坂の驛に至る頃雨は次第に強くなつて今は一足も行か
れず四邊も見へ分かの程切りに降りくらしければ、人家の軒下にな
らずみて 彌「いま〜しい強氣に降るは〜」

北「此の雨じや行かれまい、コリヤ泊り度くなつた」

此時直ぐ前の宿屋の婆これを開き付け「お前ら泊らしやりませま
〜」

彌「泊らう」と二人足を洗ふて奥へ通る。

彌「コレ〜女中素湯を一抔くんな」女「ハイ〜今上げうす」

彌「北八昨日の薬をくりや」

北「何だしんりいあなかん丹か待なよ蟻の塔渡からひねり出し
らふ」

彌「エ、馬鹿いやんな腹が痛くてならぬ」北「そりやお前豆を食やア
直る」

彌「エ、悪く洒落すと早く出して呉れろい」北「其なら眞面目にそれ
田まちの反魂丹手を出しな」彌「ニツ計りくりやれガリ〜〜コリ
ヤ胡椒だはア、辛い〜」北「ハ、ハ、ハ、」

彌「時に女中奥の客は女計りだがありや何だ」女「皆巫女でお座りま

〜」

〜」

〜」

さア

北「なに巫女だこりや面白い、ちといき口を寄て貰ひていもんだ」
彌「最ふ遅かるう七ツからは寄ぬと云ふ事だ」

女「何に未だ八ツ少し過てお座りまさア」

彌「其なら聞て見てくんな己等が山の神を寄て貰ふ」

女「今聞て上げませう」トこの内せんもすぎ女中奥のいちごに其事を語るといちは承知のよし答へ水を取寄て花をさす。二人も奥に入る神おろし、出雲の國の大社神の数が九萬六千七社の御神佛の数が一萬三千四靈の靈場冥道を驚かし此に請じ奉るはあ恐れありや弓と矢のつがひの親一郎より三郎どの様も變れ水も變れ變らぬ物

は五尺の弓一打打てば寺々の佛壇に響くのうじやアアレハテ懐しや
く好く水を向て下さつた私が 彌「お前誰だ分らねへ」いち、「ハア
私は水を手向ごんの爲には唐の鏡じや子寶どの」

北「唐の鏡じや彌次さんお前のお母の事だ」
彌「ハ、アお母か其方に用は無い」

いち、「ハアレ唐の鏡ごんじや用はないか、私や其方の枕添だあつかましくも能くぞ問ふて下さつた、其方の様な意氣地無に連添て私
や一生食ふや食はず寒く成つても拾一枚着せて呉れた事はなし、寒
の冬も單物一ツア、うら欲やく」

彌「堪忍してくれ己も其時分は工面が悪くて可愛想に苦勞をしやつ

たが残り多い」北「アア彌次さんお前、泣くはハハハ、此奴は鬼の目に涙だ」

いち「其つらい目に遇ひながら草葉の蔭で其方の事を片時忘れぬ何卒其方も早く冥途へ来て下され、やがて私が迎へに来ませうから……」

彌「アア飛んだ事を云ふ遠い所を必らず迎へに来るにや及ばぬ……」

いち「そんななら私が願を叶へて下され……」彌「ア、何になりと……」いち「此のいちご殿へお金を澤山遣りませ」

彌「遣ることも……」いち「ア、名残惜しや云ひ度い事數限りは

盡せねど冥途の使繁ければ彌陀の浄土へ……」とうつむまで弓を鳴らす。

やがて口寄せが済みて彌次郎鳥目を包んでいちごに渡し其夜、いちこの室へ忍んで行くと北八も忍び来り、暗がりに間違つて北八を引張り大笑ひとなる。

いち子ぞと思ふて忍び北八に口を寄せたる事ぞ口惜しき

掛川 (袋井へ二里十六丁) (静岡縣遠江國)

東雲まだき驛路の忙し氣に引連れる朝出の馬の嘶きに旅勞れの目を擦りながら彌次郎北八起出で仕度するうち相宿に巫子が顔ふくら

がし居るも可笑く爰を立出で古宮譽田の入幡を打過ぎ右にしうどの
燭嫁が田と云へる見ゆれば彌次郎、

干からびししうどの畑に引かへて水澤山のよめが田ぞよき
其より鹽井川と云ふ所に至りけるに昨日の雨強くして橋落ちける

にや行きかふ人自ら股立を取り裾まくり上て爰を渡るに彌次郎北八
もいざや引連れて涉りなるとする折から京上りの座頭二人連此川の
歩渡なるを聞きけるにや一人の座頭 大市「モシ川は膝きりもござ
りますかな」

北「左様く、而し水が早いからお前方ア危い用心して涉りなせい」
大「ハア成程早い」

と云ひつゝ石を拾ひ川へ投込てかながへながら 大「イヤ此邊が浅い
様だ、コリヤ猿市二人ながら脚絆を取るも面倒だ、お主若役に己を
お負て涉れ」

猿市「ハ、ハ、づるい事を吐す、ぢあ拳で行かう、何でも負けた者
が背負つて渡るのだぞ宜いか」

大「こりア面白い、サア来い」
猿「トヤンゴウサイ〜」右手で拳を打ちながら、両方から左りの

手を出して互ひに拳を打つ手を握り合ひ 大「サア勝つたぞ〜」
猿「エ、忌々しい、そんなら此の風呂敷包みを貴様一緒に背負へ、
それ宜いか、サア来い〜」支度をして背中を向けた、これを見て

彌次郎兵衛、有難い〜と猿市の背中に背負さると、猿市は連れ
 犬市と思つてゐるから、心得てサツ〜と川へ這入り、難なく向ふ
 へ渡して仕舞ふと此方の岸に残つた犬市、餘り猿市が渡して呉れ
 が遅いから犬「イヤ猿よ、何うする早く川を渡さぬか」
 呼び立てられて猿市は向ふの岸で腹を立てた猿「こりア人を馬鹿
 にするな、たつた今背負つて渡して遣つたに、又其方の岸へ戻つた
 りなんぞして、お前俺を騙るな」

犬「馬鹿ア云へ、俺ればかりが渡つて太い奴つだ」

猿「イヤ太いとは其方の事だ」

犬「コリヤ己れ兄弟子に向つて言語同断な、早く来て渡さぬか」甚

い権幕で怒つてゐるから猿市は仕方なく、又此方の岸へ渡つて戻り
 甚「そんならサア早く背負さりなさい」
 背中を出した處を北八、締めたと手を掛けて猿市の背に負はれる
 ど、猿市は又サツ〜と川へ這入つて行く、犬市は大に疝癢を立て
 た。

犬「コレ猿市、お前何處に居る」云ふと猿市は川の中で猿「オヤ然
 うすると此奴ツは誰れだ」云ひも終らぬうち北八を川の中へドンブ
 リ落した。

北「ヤア〜助けて呉れ〜」

大聲出して手足を藻掻きながら流れるから、彌次郎兵衛大に驚き

直様川の中へ飛び込んで引上げると、頭から水の中へ落されて流れたのだからピツシヨリ着物の儘で濡れ鼠 北エ、座頭奴が飛んだ目に遭はしやがった」

彌「ハ、、、先づ着物でも脱げ、絞つて遣らう」

北「全體彌次さんお前エが悪い、何んの背負らすとも宜いものを、お前が手本を出したからツイ俺も」

彌「川へ陥つたが氣の毒なハ、、、それで一首やらかしたぞ」
はまりけり目の無き人と侮つてむくいはずは早き川の流れに

北エ、聞き度くも無エ止して呉んナ、ア、寒いく」裸體になつてガタ／＼顔へながら着物を絞る、そのうちに彼の座頭は川を渡つ

てサツサと行き過ぎる。

彌「此處で干しても居られまいから、着換を出して着たが宜ひ、何處かで火を焚いてあぶるが宜い」

北エ、忌々しい風を胃ひた、ハツクシヨン」

ブツ／＼小言を言ひながら着物を出して着換へ、濡れた着物は一寸と絞つて片手に提げて出掛けると、程なく掛川の驛に到る。

棒鼻の茶屋女 女「御飯をお食りなさいまし、繆と蒟蒻と干大根の吸物もございます、蛸の船場煮もございます、お休みなさいまし」

此方では又人足の歌 人「吹けばナア吹く程ナアーンえ持つ物ア頼」

いナアーンえ、綿をサア入れたや長持に、綿をナアンエヨウしつた
か何うだか」馬の嘶きヒイン〜」

黒「オヤ北八見ろ、先刻の座頭め等が那處で飲んで居やアがるぞ」

北「オ、ほんに此奴ツは宜い事がある、俺等を川へ溜めた意趣返し
をして遣らう」作り聲をして彼の座頭の酒を飲んで居る茶店へ這入
つて来た。

北「ハイ御免んなせえ」

女「お出でなさいまし」早速茶を一つ汲んで持つて来る、北八は飲
の座頭の側へ腰を掛けた。

女「お仕度でもなさいますか」

黒「イヤまだ〜、腹はボンボコなんだ」云つて居る内も彼の座頭二
人は頻りに酒を飲みながら、今這入つて来たのが先刻の二人の者と
は知らないから、頻りに噂さをして居る。

大「何うも今少し酒が足らぬ様だ。モウ二合やらかそるか」

黒「然うぢやなア御亭主〜、もう少し酒を頼みます」黒「ハイ〜
畏まりました」

大「時に今川へ陥つた筈共は何うしたらう」

黒「然うよな、ハ、ハ、ハ、先づ變り目を一つやらう」直ぐに一杯

注いで一口飲み、盃を下に置くと北八はハツ手を出して盃の酒を
飲んで仕舞ひ、チャンと再び元の處へ置く。

「イヤ何うも太い奴だ、ちやんと俺に脊負りアがつて、其の代り水を喰やアがつた時は助けて呉れろと悲しい聲を出して居つた、何でも彼でもカスリを取る事はかり考へている奴だから、大方那奴は騙兒だらうよ」

大「然うさ、何うせ碌な者デアない、那あ云ふやつは斯んなところへ来ても、得てして喰ひ逃げなどをして打ち擲はされる奴だ、イヤ時に盃は何うした」

「ホンに忘れて居た」

盃を取り上げて飲まうとした處が、酒が一滴もない、猿市は不思議さうな顔つきで「オヤこぼしたか知ら……」

云ひながら此處ら邊りを探りまわし「ハテ不思議な、マア改めて差さう」

又一杯注いで一口飲んで下に置くと、北八は又その盃を取つてぐつと飲んで仕舞つた。

大「斯うしている處へ先刻の奴等が来たら可笑しからう」

「ナニ那奴等は大方着物を絞つたり干したりして、まだ那方に間誤して居るだらう、智恵のない筈共だ」悪口たら／＼で盃を取りあげて口へ持つて行つて見ると、又もや酒は一滴もない。

「おやッこれは何うだ」

大「おや又こぼしたのか意氣地のない」「イヤこぼしはせぬが、ハ

テ奇妙頂來な」

大「イヤ手前エ其んな事を云つて獨りで飲むつもりだな」云ふ内に北八その徳利を取つて、自分が飲んだ茶呑茶碗に残らす酒を明け、密と徳利を元の處へ置いた。

大「コリヤ猿よ、盃をまわさぬか」盃を引手繰つて徳利を取つて注いで見たが、今度は徳利の酒も一滴もない。

大「ヤアこの猿市奴、一人で喰つて仕舞アがつた」大「なに一人で飲んだ、飛んだ事を……」

大「それでも徳利が薩張りだ」大「何んだ徳利に酒がない……イヤ此處の御亭主、私等を盲目と侮つてこんな横着な事をするのか、

二合の酒が唯た二口飲むか飲まないうちにモウ無くなつていゝるは何うしたものだ」

大「ヘエ、今私しが二合、しかも澤山ついであげましたに、大方こぼしたのでございませう」

大「なにこぼすものか、商人に似合ぬ事をするから、この酒代は拂ひませぬぞ」大立腹の様子。

此時門口に遊んでいた子守が、最前からの様子を残らす見て居たが、今座頭が怒つたのを見て、北八の方を指差し、子守「ワアイ、座頭さんの酒は、皆んなアノ人が茶碗へついで明けてしまつた」

大「オヤ此の子は飛んだ事を云ふ、是りア茶だ」云ひながら飲

みさしの茶碗の酒をグイッと飲んで仕舞つた。

「イヤお前さん大分酒くさい、そして顔が赤くなつたのは大方あの人達の酒を飲んだのだな」

「エ、此の人も同じ様な事を云つて途方もねえ、私の顔の赤くなつたのは茶に酔つたのだ、私は變つた男で茶を澤山に飲むと屹度酔ひます、酒に酔つて人は管を巻くが、茶に酔つた證據にはちやばかり云ふが辨だ、そこで茶ばかりながら誰方も茶様ヂヤ、ハ、、、」

「イヤ其の手はくわぬ、子供は正直だ、こりアお前方が横取りして飲んだに違ひはない、酒代を拂つて呉れ」

「茶れやれ、茶りとは茶わいもない事を茶べらつしやる、茶つきから飲んだは茶ばかり、茶と衆の茶やを茶くぶくした覺へはござらぬ、わるい茶れた、アハ、、、」

「イヤこれ目の見への者だと思つて、その茶らつぼては置き、見て居る子供が證據人だ」

「まだ確かな事は御亭主、アノ人の飲んだ茶碗が酒臭いか嗅いで見たが宜い」

動きの取れない處へ氣を注げられたから、ハツと驚きながら北八茶碗を取つて隠そうとすると、隙さず亭主茶碗を引たくつて嗅いで見た。

亭「ヒヤア臭い〜、そして酒でニチャ〜する。こりアお前さん達が飲んだに違ひない、酒代を貰ひますぞ」云はれて北八も此奴ツ此の儘では濟まないと思つたから 北「イヤ茶けは飲まぬから茶か代は拂はぬ、茶代なら幾何でも拂ふ、何程だ」

亭「そんなら茶代を置いたが宜い、では茶が二合で六十四文」北「ヤッ何んだ、茶を二合飲んだと、途方もねえ」

彌「エ、面倒な拂つてしまつたが宜い、手前エのする事ア何でも綱まらねえ、足元の明るいうち拂つて仕舞へ」と目顔で知らせると北八も仕様事なしに六十四文出して茶店へ拂つた。

袁「イヤ早や飛んだ人達ちだ、大方先刻背負つたのもお前さん方で

あらう、人の買つた酒を横取りして飲むと云ふは、まの泥棒と云ふものだ」

北「なに泥棒だ、此の胴盲目めが」立ち掛らんとするから彌次郎兵衛慌て、押し留め 彌「ハテ此方が悪ひ、モシ了簡して呉んなせえ、此奴ツは茶に酔ふて氣が強くなつて不可ません、サア行かう〜、アイお茶らば〜」

元藏口に紛らしながら、北八を無理に引立て、此處を立ち出で、足早やに此の驛を打ち過ぎた。

北「エ、忌々しい、今日は飛んだ間がわるひ、錢を出して酒を飲みながら回まされたとはつまらねえ」